
一つ家の鬼娘！

ぱんくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つ家の鬼娘！

【Nコード】

N5052W

【作者名】

ばんくん

【あらすじ】

「安達ヶ原の鬼婆」と「浅茅ヶ原の鬼婆」。

二つの物語が交差し、平凡な高校生「遠藤芳樹」に降りかかる。

「何故自分が」と悩むが、そこには抜け出せない運命があった。

ハタシワダレ

昔、東京に鬼婆が居たという。

詳しい事は分からないが、俺はその鬼婆と関係がある池の跡地の近くに住んでいる。

どついう関係かは分からないし、特に怖くもないのでこんな薄暗い午前3時に散歩している。

「ねーみ。」

夏なのでそんなに寒くない。むしろ暑い。

なぜこんな時間に散歩しているか気になるだろう。簡単に言うと寝ないようにだ。何故寝たくないかと言うと、今寝ると学校に遅刻するからだ。

俺は夜遅くまで起きていると朝起きられないから寝ないで学校に行く。

だがしかしその後遺症として、授業中に恐るべき眠気に襲われる。その時は、身を全てまかせ気持ちよく寝る。

「う。。ううう。。うう。」

マジで？見間違いだよな？俺の視力はアフリカの先住民なみだぞ？
.....はつきりと白い女の子が見える。

「あ〜」

「うわっ」

「すつ、すみません！脅かしちゃって」

幽霊の癖に人間に話しかけてきた。

「あのお、大丈夫ですか？」

「あつ、ああ。大丈夫。うん」

ま、普通の人間だろうね。幽霊なんている訳ない。この辺になら、
鬼婆の怨霊でも居て良いと思うけど。

「あの、こんな時間になにしてるの？」

「すみません。道が分からなくなっちゃって」

「そうなんだ。俺で良ければ案内するよ」

暇だし結構可愛い子だし。

「ありがとうございます。この近くに池はありませんか？」

ん？池？この近くに池は。あぁ。

「この近くに昔は池があったらしいけど、もう埋め立てられちゃ
ったよ？」

「えっ？」

なんだろう。俺が生まれてくる前に埋め立てられたらしいけど、
知らないのかな？それに見たことない子だけどここらへんの子だろ。

「えーと、俺、遠藤芳樹。君は？」

「私？私は、誰？」

えと、これは？

記憶喪失？

いみわからん

俺は一人暮らしだ。親父は仕事で海外だ。お袋はそれについていた。理由は仕事先がワイハだからだ。子供よりワイハをとった。俺は一人暮らしだ。だった。だったらしい。さっきまで。

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞ」

これがだれだかわかるか諸君。さっき会った女の子だ。池の跡地まで行こうとしたら

「あなたの家ってこの辺ですか？のどが乾いたのでお水が欲しいんですけど」

自販機ないし家近いから家まで連れてきたら、

「いいお家ですね。お一人で暮らしているんですか？」

って聞いてきたから「はい」と答えたら

「よし決めた！俺ここに住む！お前俺の召使いにしてやる！メシ作れ！」

普通の人なら理解出来ないだろう。

「おい何してんだ。早くしろよ召使い」

「あつ、あれ？キミ女の子だよね？てかこの家に住む？召使い？」

わけわからん。

「当たり前だ！女に決まってるだろ！ナイスバディーすぎるだろ！」

「え、ええと、召つ……」

「早くしろ！ハラへった！」

で、

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞ」

意味分かん。家出してもらいたい。てか住むとか冗談だよな？
兎に角うるさいからメシを作ることにした。

俺って優しいよな。

いみわからん(後書き)

「いっっッッ

暗い。クライ。苦しい。クルシイ。ここは。ココハ。どこだ。

ドコダ。私は。オマエハ。誰だ？ オマエハ！

「ッ！？ あ、あれ？ここはどこだ？俺は 確か ？」

わからない。自分が誰かも、ここがどこかも、何もわからない。
なんなのだろう。よく分からないけどなぜか、凄く悲しい。分
らないが、何かに溺れていた気がする。

まあとりあえず家に帰 れない。分からない。でも、凄く

温かいぬくもりがある家が会った気がする ツ ！？

「コロセ！！キリサケ！！カミクダケ！！アイツヲ！！」

ッなっ、なに？さっきの？殺す？誰を？切り裂く？何を？

と、とりあえず。何かに溺れていた気がするから海とか池を探そ
う。

ん？あそこにバカそうな男がいる <ニタア

ケツケツケツ。家発見だな。ククク

「あのお

「で、こうなったわけか」

「うん、このオムライスそんなうまくないな。むしろへた」
こいつっ

「ふう。まあとにかくソレ食ったら出てけ」

「ゴツゴホゴホツ　うえっ」

むせたよきつたねーな

「おっ、おまつ　ゴホツ　ッ　うえっぶっ」

「おいおい大丈夫かよ。女なのにカワイクねー」

「お前はこんな身よりのないか弱き乙女に家から出てけつたんだぞー！」

「当たり前だ！第一まだ名前も知らない女子と一緒にくらせるか
！！」

「男なのに根性ねーな！タマ千切るぞ！」

「か弱い乙女がそんなこといってんじゃねえ！それに男だから気にすんじゃねーか！」

「メンドクセー奴だな！お前なんかといたいと思う奴ぜってーいねーよ！」

「じゃあ出てけ！」

「えっ？」

おお？

「こいついやっ、べっ、別に本気でいっただんじゃ
っ　　んう」

おお。恥ずかしがってる。結構カワイイかも。

「こいつ、いいから俺をここに住まわせる！このクソハゲカス！
いや、そうでもねーな。」

「取りあえず名前教えてくれよ」

「は？」

「いや、名前。」

「お前人の話聞いてたのか？記憶喪失で忘れちったよ」

「え？本当に記憶喪失なのか？」

「当たり前だ！でなきゃ家でねてるよ！！」

うーん。本当に記憶喪失か。どうしよう。交番？病院？病院やっ
てっかな？今何時だろ　　ってああ~~~~！！！！！！

「あんだようるせーな」

「お前と話してたら8時になっちゃった！！！！学校遅刻やん！！」

「学校遅刻を俺のせいにするなよ！」

「ああ~~~~もっつ！！！！」

「学校ってなあに？」

じじじッッッ

じじじっしっし (後書き)

次回をお楽しみに!

池にある

とりあえず俺は学校に來た。名無しの女は家から追い出し、鍵をバツチリかけて家を出た。女は池を探すらしい。

「池が凄く気になる。池にはゼツターなんかある！」

水だよ。池にはゼツター水があるよ。まあ面倒だからいわなかったケド。

一時限目は理科か。移動があるな。

「おい遠藤！理科室いこーぜ！」

「おう。てかお前声うるせ。」

「お前の聴覚がすげーんだって。ハツハツハツ！」

八八八じゃねえよ。横山とは中学からの友達だ。下の名前は忘れた。悪い奴ではない。

「なあ知ってるか？」

「何を」

「お前が住んでる所って、昔鬼がいたんだってよ」

「聞いたことあるわ。それ」

「でさあ、歴史のレポートそれにしようぜ」

こいつは何言ってるんだ。噂を調べてどうする。

「割と有名なのはなしだよ、「三枚のお札」って昔話してるか？」

「あれだろ？山姥から三枚のお札をつかって逃げるやつ。」

「ああ。それと関係してるらしい」

「ほんとだよ」

「それを調べに今日、図書館にいこう」

メンド。でもまあ、いいか。早くレポート書いじろ。

放課後だ。

「うしっ！じゃあ行くか！遠藤！

」
「おう」

結構早くついた。そして早く資料が見つかった。

正直驚いた。伝説の名前は「浅茅ヶ原の鬼婆」というらしい。

近くの池の跡地がどういう物かも分かった。

少し、ほんの少し、恐怖を感

じた

池にある(後書き)

「浅茅ヶ原の鬼婆」(あさじがはらのおにば)は、ちやんとした昔話です

安達ヶ原の鬼婆

昔、京の都に岩手という女性が三人の娘と幸せに暮らしていた。ある日、長女が病に掛かり喋る事が出来なくなってしまった。占い師曰わく、「腹の中の赤子の肝を与えれば病はなくなる」とのこと。

岩手は三人の娘を残し北へ旅立ち、奥州の安達ヶ原にたどりつき、その小屋で獲物をまつた。

何年かたち、一組の若い夫婦が一晚泊めてくれと訪ねてきた。なんでも、婦の腹には子がいるという。

岩手は夫が出かけている隙に婦の腹を切り裂いた。そして喜びに浸った。「これで娘の病は治る」と。

岩手は笑いつづけた。笑い疲れたところに、夫が帰ってきた。

夫は鳴きながら婦の名前を叫んだ。そんな夫を岩手は、

殺シタ

首を切り裂き、はらわたをえぐり出した。

あとは京にかえり、娘に会うだけだ。だが、岩手はきずいてしまった。夫の叫んだ名前。

どこかで聞いたことがある。不意に、夫婦の肉塊に目をやると婦の手にお守りが握ってある。それを見て岩手は全てを悟った。

殺したのは自分の助けようとした娘で、自分は娘とその夫と孫を自分の手で八つ裂きにしたのだ。

岩手の頭は乱れ、宿を借りにきたものを全員殺した。

岩手は鬼婆となってし

まった。

安達ヶ原の鬼婆（後書き）

次は三枚のお札です

三枚のお札

殺戮を繰り返した岩手のもとに、一人の坊主が宿をかりにきた。

岩手は坊主が寝ている隙に坊主を殺そうとしたとき、坊主はそれに気づき、一目散に逃げ出した。

岩手は坊主を追いかけた。坊主が札を投げると、札は大河になった。

岩手は大河の水を飲み干し、さらに坊主を追いかけた。坊主が2枚目の札を投げると、札はアリ地獄のようになった。岩手は先ほど飲んだ水を吐き出し、砂を滑らないようにしてさらに坊主を追った。

坊主が三枚目の札を投げると、札は炎になった。岩手は火傷をして気絶してしまった。

目が覚めるとそこは知らない所だった。どうやら家のようだ。

「お母さん！良かった！目が覚めたのね！」

知らない女性が二人いた。話を聞くと、二人は自分の娘で、姉の事をしり、安達ヶ原（奥州）まで岩手を探しに行き、倒れていた岩手を近くの街まで担いできて、医者に治療してもらったそうだ。

その後、岩手は浅茅ヶ原（江戸）で娘と宿屋をしながら幸せに暮らした。

三枚のお札（後書き）

次回は浅茅ヶ原の鬼婆です

浅茅ヶ原の鬼婆

岩手は娘と宿屋をしていたが、最早鬼婆となっしまい、旅人を殺す事を止めることは出来なかった。

岩手は旅人の頭を石で割り、賃金を奪ってから近くの池に遺体を捨てていた。娘はこの行いを見て見ぬふりしていた。

死者が999人に達した時、一人の若い男が宿を借りにきた。

男と三女は恋に落ちた。それを知った次女は男に訳を説明し、三女を連れて逃げるように言った。だが逃げた事が分かれば岩手は男を追う。次女は自分が囿になると決めた。

夜になり、岩手はいつものように寝ている旅人の頭を石で殴り殺した。

旅人の体をまさぐっていると、妙な事に気づく。旅人は男の筈なのにまるで女のようだ。

死体の顔を見て仰天した。そこには自分の娘がいた。岩手は自分の娘を二人も殺してしまった。

岩手は鳴きながら娘の死体を抱き、いつも死体を捨てていた池に身を投げた。

「それがあの池か。。」

俺は図書館で借りた本を読みながら呟いた。

なんと言うか、驚いた。結構マジメな話だったな。

「その話には続きがあるぜ」

「うわっ！いつ入ってきた！なんで帰ってきた！」

「自分ちに帰って悪いか？」

この女マジか？てか何かテンション低いな。何かあったのか？

い、いや。心配してるとかそんなじゃないゾ？

「何ブツブツ言ってるんだよ」

「いついや！別に。」

聞こえてないよな？エスパー？

「てか、続きってなんだよ。記憶なくしたんじゃないのかよ」

ちよつと意地悪に言ってみる。

「さつき思い出した。」

コノヤロツ

「全部思い出した。名前も、過去も、自分がどんな奴かも。」

？

「兎に角その話の続きを話すよ」

なんかしおらしい。落ち着かないな。

浅茅ヶ原の鬼婆（後書き）

コメント頂ければ光栄です。

関係あるさ

何なのだろう。落ち着かない。朝は凄くうるさかったのに、今は不自然なほど静かだ。何かあったのだろうか。

「お前、今日どこ行ってたんだ？何かあったのか？」

「お前には関係ねーだろ」

確かに関係ないが、何か気になる。しゃあねえ。

「関係あるさ。俺はお前の家族だ」

あーはずい。「あるさ」ってなんだよ。「さ」って。

「ここに住むの認めてくれんのか？」

「まあな。兎に角記憶治ったなら名前を教えろ。んでなにがあったかおしえてくれ」

「ああ。じゃあとりあえず、俺の名前は野菊^{のぎく}だ。」

名字 じゃないか。変わった名前だな。

「信じてくれないだろうけど、俺は

話をきいて驚いた。正直、信じられない。俺は言葉が出なかつた。

関係あるさ(後書き)

見てくれてありがとうございます。

野菊

岩手の手からにげた男と三女は数ヶ月後、事件があつた浅茅ヶ原の家に戻り、幸せに暮らしていた。

だが、岩手の噂は江戸中に広まっつていて、男と三女の心を苦しめた。

そして男はストレスから女と浮気をした。だが、三女は咎めることなく男を愛し続けた。

ある日、男は知らない女を連れてきた。いや、知っている。男の浮気相手だ。その腹は大きくなつてゐる。

男は口を開いた。

「このとおりだ。私はこの女と子を作つた。この女を愛した」

知つてゐる。以前から知つていた。でも、それでもよかつた。

「知つていたわ。でもいいの。それでもあなたを愛してる」

「離縁しよう」

「？」

何故？三女は男を愛してるのに。何故、離縁なんてする必要がある？

それは至極簡単な事だ。

「私はこの女を愛している。お前を愛することはできない。離縁をしよう」

三女は怨みを覚えた。それが誰に対してか分からない。三女は無意識に包丁で男に切りかかった。だが逆に男は三女を殺した。

こうなることはわかつていたのだ。何せ、三女は鬼婆の娘だ。

さらに言えば、男は離縁などする気はなく、最初から三女を殺し

にきたのだ。

男は三女の遺体を岩手が身を投げた池に捨て、浅茅ヶ原の家で女と仲むつまじく暮らした。

「この浅茅ヶ原の鬼婆という話は、一つの家でおきた事件だからのちのち、一つ家の鬼婆とも言われるそうだ」

うーん。謎だ。色々気になる所はあるが、一番気になるのは何故、こんなにくわしい？

記憶を無くす前はオカルト好きだったのか？

「おい。何黙ってたんだ」

「あつ、ああ。悪い。でもよく知ってるな。こついつの好きなの？」

「。。」
やべ、禁句か？

「え、えーと、野菊だったよな？い、いやー変わった名前だね。」

「。。」
さすがに失礼か。

「な、名前といえば、登場人物の名前がわかんないから面倒だな」

「知ってるよ。名前」

やっとしゃべった。

「へ、へー。凄いね！よく調べたよ！うん！」

「。。」

「じ、じゃあ三姉妹の名前教えてよ」

「長女が桔梗^{ききょう}。次女が笹百合^{ささゆり}」

「三女は？」

「三女は」

三女は

」

どうしたんだ？忘れたのか？

「三女の名前は」

野菊^{のぎく}」

「ん？野菊？野菊ってお前と一緒にじゃん。あ、もしかして三女ってお前なんじゃね〜の〜？」

ちやかしてみた。

「

ん

まじで？

家族

普通は信じない。目の前にいる女は鬼婆の娘で、何十年、何百年も前に死んでいるんだ。だが俺の中の何か、いや、誰かが

「彼女を信じ、彼女を受け入れ、彼女を愛し、彼女に許しを請え」と呟く。誰かはわからない。聞いた事もない。

「わるいな。信じないよな、こんな話。忘れてくれ。」

凄く寂しそうだ。放っておけない。いや、放ってはいけない気がする。

「いや、信じる。お前を信じるよ、野菊」

「え？何だよ。普通は信じないだろ。お前の頭おかしいんじゃないか？」

「確におかしいかもな。でも、お前を放ってはおけない。記憶は全部思い出したのか？」

「い、いや、まだ少し曖昧な所がある けど」

「なら少しの間、記憶がはっきりするまでこの家に住むといい」

「いいのか？」

「ああ。家族にしてやるって言ったしな」

何故か抵抗がない。この女、野菊と家族になり、共に生活するのは運命なのかもしれない。

「あ、ありがとう　と　う」

「泣いてんのか？」

「ば、馬鹿　。　お　俺が　泣くわけ　　ない　だろ」

「強がりやがって　　。」

野菊に聞こえないくらいに呟いた。俺は微笑んでいた。野菊のこ
ういう所、嫌いじゃないらしい。いや、むしろ　　。

「ケツ、らしくねえか。お前も泣くななんてらしくないぞ、野菊。」

「だ、だから泣いてねーって！」

「ハハハッ」

「わっ、笑うな、ボケ！！」

「さあ、もう夕飯だ。何か作るか？」

「オムライス」

「いいぜ！得意だからな！」

「不味いけどな」

「うるせえ」

何かコイツ、昔の人なのに現代的な言葉つかうよな。服も着物とかじゃないし。

まあ今度聞けばいいか。取りあえずオムライス作ろう。野菊うるさいからな。

「なあ野菊」

「んあ？」

「これから宜しくな」

「い、いいから早くオムライス作れ、バカ芳樹！」

「はいはい」

ホント素直じゃないな。まあそれがいいところか。ふと野菊を見ると、何やら旅番組を見てるらしい。箱根か？

「なあ芳樹」

「ん〜？」

「新婚旅行ここなんてどうだ〜？」

「は？」

「だ〜か〜ら〜、新婚旅こお〜」

何いってんだ？この女。

「え〜と、誰の？」

「バカッ！俺達のに決まってるだろ！」

「なんだよ新婚て！」

「だってお前が言ったじゃねーか！家族になろう、一緒に住もうって！」

「いやいやいやっ！そう言う意味じゃないからっ！」

オムライスを作る手は止めない。

「子供は何人がいいんだ？10人でも20人でも俺頑張るぜ？おっと、夜が大変だなあ。少しは寝かせてくれよ？」

「バツバカ！なにいつてんだ！恥ずかしくないのか！」

そんな話をしながら割った卵は双子だった。

家族（後書き）

ユニーク1000人を超えました。ありがとうございます。

「おいテメエ！どういう事だ！女の子を放置プレイって！」

「朝（昼か）からうるせーな！。そんな事より頭大丈夫か？」

「テメエ（怒）二人の愛の育みをそんなことってなんだ！しかも人を変人あつかいか！」

「いやいや悪かった。主語がぬけてた。さっき頭が痛いってうなされてたから」

「ああ？そんな事いつてねえ。今は頭より愛の方が大事だ！」

朝から疲れるな！。今日学校休みでよかったわ！。しかもあと3日行ったら夏休みだし。

とりあえず朝メシ食うか。

「野菊、お前何か作れるか？」

「卵かけご飯」

「チャーハン作ってやるよ」

「チャーハンって？」

「見りゃ分かる」

こいつの生きてた時代にチャーハンはないのか。

？

こいつの生きてた時代？こいつの生きてた？生きてた？

「な、なあ野菊？」

「ん〜?」

「お前は何年も前に死んだんだよな？」

「ああ。殺された」

「お前は今なんなんだ？もしかして、幽霊？」

「いいや。ちゃんと心臓は動いてるぞ？まあでも300年も生きる人間もいないだろ」

聞かなきゃよかった。少なくともこの女は人じゃないって事か。

野菜炒め

ねーみ。もう朝だ。しかも今日から学校だ。とりあえず野菊起こすか。

「おい、野菊。もう朝だぞ。起きろ。」

っていねえし。もう起きたのか？あいつが早起きなんて、何か違和感があ

「朝だぞ、起きろ！バカ芳樹！！」

「うわっ！！」

いきなり、ドアをぶち破る勢いで野菊が部屋に来た。

「朝ご飯作つといたから、早く準備して学校遅刻しないようにいけよっ。」

っつて元気よく部屋から出て行った。何なんだ？兎に角飯食うか。

「おう芳樹！冷めねーうちに朝飯食え！」

テーブルにはご飯と野菜炒めと味噌汁がおいてある。

「なあ。これ全部野菊が作ったのか？」

「当たり前だ！他に誰がいるんだ？」

野菊は台所から叫んだ。今度は何作ってんだ？俺がテーブルにつくと、ほぼ同時に野菊が向かい合って座った。

「うまいか？美味しいか？」

ジアイアニズムかよ。まだ食べてねえし。

じゃあとりあえず、野菜炒めを食べてみるか。

「な、なあ野菊。これホントにお前が作ったのか？」

「お、おう。美味しくないか？」

「嫌、凄くうまい！驚いた！」

「ホントか！？良かった！」

凄く嬉しそうだ。コイツは時々、女の子らしい可愛い顔をする。

俺は野菊のそう言う所が、凄く愛おしく思える。

「じゃ、俺もた〜べよつ。」

野菊が箸を取った。何か、一人じゃない朝ご飯は久々だ。最初に野菊がここに住むといった時は驚いたが、案外悪くない。

「おい芳樹、早くしないと学校遅刻すんぞ」

「ん？あ、ああ。」

変なこと考えてないで、飯食べて早く学校行こう。遅刻やだし。今何時だろ。

「 ああー！ー！ー！！！！」

「うわあ！なんだよ、びっくりさせんなよ！」

何だ、自分の事は棚に上げやがって。ってそんな事言ってる場合じゃない！もう8時10分！遅刻寸前だ！

「悪い野菊！学校遅刻しそうだからもう行くわ！」

俺は急いで家を出ようとした。

「まて芳樹！お弁当！」

「あ、ありがとう。コレも野菊が？」

「お、おう。残してくんなよ！」

「ああ勿論！じゃあなっ！」

「ま、まて！もうーっ！」

「今度はなん」

チユ~~~~~ウ

ん？何がおきた？唇に柔らかい物が、少し強めに、ぎこちなく当たっている。

「いつ、行ってらっしゃいの、チ、チュウ　だ。」

「え?」

「は、早く行け!遅刻するぞ!」

「あ、ああ。いつてき　ます」

俺は玄関のドアを開けた。

「は、早く　帰って　こいよ」

「ん?何か言ったか?」

「バ、バババ、バカ!!!何も言ってねえよ!早く行けクソ!」

ゲシッ!!!

行って!!!あの野郎、人の事蹴りやがった!

ファーストキスが野菜炒めの味だった。
。

野菜炒め（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

弁当

一騒動のあと、俺は学校に来た。今は休み時間だ。騒いでいるおそらくサッカー部と、それをみて笑う女子。俺アイツらみたいな女子なら野菊の方がまだマシだな。

「なーにがマシなんだ？」

「うわっ！なんだ、横山か。」

コイツは横山。名前は知らん。中学のころからの・・・デジャヴ？

「それよりよ。レポートどうすんだ？ちゃんと調べたか？」

ああ。コイツ前に登場してたな。一緒にレポート書こうとかいて。その内容は・・・。

「なあ横山。やっぱり違うヤツ調べようぜ？」

「おいおい冗談よせよ。俺メツチャ調べたぞ？」

横山には悪いけど、野菊の事を考えるとなんつーか、な？

「俺チヨ一調べたんだ！何か・・・」

そう言っつて野菊が話してくれたことと同じような事を、淡々と話し始めた。ただ、一つ新しい情報があった。野菊を裏切った男、つまり野菊の夫の子孫がこの時代に生きてるらしい。

横山は

「あくまで噂。だいたい、作り話の登場人物の子孫なんているかよ」

と言つてたが、俺は野菊が居るから信じるしかない。なんて考えてたら午前の授業が終わり、昼休みになった。

「おい芳樹。学食いこうぜ？」

「おじよ」

俺と横山はいつもこんな感じだ。なんつーか、コイツはあきない。だいぶ仲が良い。と自分は思っている。コイツは知らんが。

「さて、今日は何にしようかな」

俺が何買うか迷っていると

「どうせコロツケパンだろ？」

クソ、横山め。俺だつてたまには違うのも食べる。

「そいつお前はどうせサンドイッチ……」

つてもう買ってるし、サンドイッチ。

「お前いつもサンドイッチで言うけどさ、俺的サンドウィッチだと思つよ？」

また意味分からん事いつてきやがった。

「バカ。ウィッチだと魔女が作ったみたいだろ」

なんてくだらないこと言いながら、俺はコロッケパンを買った。

「よし食べるか！」

何かいつもコイツと食べてるな。

「あ

「?どうした芳樹。」

そうだ。思い出した。今日は野菊が弁当作ってくれたんだ。しゃあない、今は弁当食べてパンは野菊にお土産だな。

「パン食べないのか？」

「やらん。」

弁当を出したら横山が絶叫し、「もう一緒に食べてやらん！」と怒鳴った。明日から一人で弁当か。

悩み

よしっ。学校終わったから帰るか。野菊の弁当がスゲー美味かった。

「ふう。」

ため息ついちった。さてどうするか。

野菊を裏切って、しかも野菊を殺した男の子孫が、今生きている。勿論、その子孫は野菊とは関係ない。でも野菊がそれをしつたらどうするだろう。

野菊は裏切った男を恨み、殺そうとした。だが逆に殺され、裏切った男は幸せに暮らし、子を残した。

どうするかな。野菊に言うべきか、いわざるべきか。迷ううちに家についてしまった。結局どうすりゃいいんだか。

「ただいま」

「う、うう。うううう……」

ん？なんだ？変なうめき声がきこえる。野菊か？

「おい。どしたん……！！」

「ぐ、ぐあああ……」

野菊が頭を抱えてうずくまっていた。

「お、おい野菊！どうしたんだ！？大丈夫か！？」

「ぐ、あ、頭が・・・痛・・・い。」

頭？前にも頭が痛いよ、うなされてたが、なんなんだろう。病気か？

「と、とりあえず、病院か？救急車？どうしよう！」

やべ〜。超テンパってる。ヘタレすぎるな。

「いや、大丈夫・・・だ。芳樹のおかげで落ち着いた。」

俺なんもしてないけど。

「とりあえず今日は休め。今度様子を見て病院にいこう。」

「い、いいよ！俺は大丈夫だ。病院なんて・・・いい。」

「いやいや、前も頭痛いっていったやん！今度の休みに病院いこう。いったほうがいいって。」

「いって！頭なんか痛くない！病院なんていなくていいんだよー！」

？なんでこんなに病院いきたくないんだ？

「それより芳樹！ちゃんと弁当食べたろうな！残してたら承知しねえぞ！」

「ああ、ちゃんと美味しくいただきましたよ。コレ、間違ってたか

ったパン。やるよ」

「お、おう」

「さて話を戻して、今度病院いくぞ。」

「クソッ」

「話の逸らしかたが強引なんだよ。で、なんでそんなに病院がやなんだ？」

「べ、別につ！別に病院いくほど痛くねーからだよ！」

「イツまさか・・・」

「なあ。お前もしかして・・・病院怖い？」

「！」

ずばしか。

「iiiiiiiiいやいや！別に怖くねえよ！怖いわけねえよ！」

「怖くないなら次の休みは病院だ。」

「う、ううう・・・。どうしてもか？」

「いいや。様子を見てだ。よくなれば行かない。」

「ほんとか!？」

「ああ。だから病院いなくてすむように、今日はもう寝る」

「おう！じゃあ俺もう寝るわ！おやすみー！ー！ー！」

「おやすみ。」

何か・・・あつかいやすっ。

|||||

さて、風呂も入ったし、もう寝るか。野菊にあのこと言うかわないか、まだき決めてない。まあ明日考えるか。今日は寝よう。

俺は自分の部屋にいった。が！！！！

野菊のいびきがうるさいので今日はソファで寝る事にした。

悩み（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。ごまごまーす。

当然の一撃

もう朝か。ソファで寝たから首が痛い。野菊はまだ起きてないようだ。昨日すげー早く寝たのにまだ起きてないって事は、結構具合が悪いのかもしれない。

今日と明日学校にいったら夏休みだ。なるべく早く、野菊を病院に連れて行こう。

7時半か。準備してもう学校に行こう。……？

心なしか、リビングが片付いている気がする。溜まっていた洗濯物や食器も洗ってある。もしかして昨日野菊がやってくれたのか？ きつとそうだ。アイツはあんな性格だが、割と家事が出来るらしい。

「ん〜。おはよう芳樹〜」

「ああ、おはよう野菊。具合はどうだ？」

「おう！バリバリ元気だぜ！」

なんか小三の男子みたいだな。

「つーか芳樹、早く起きたなら俺の事起こせよ。」

「ん？ああ、昨日頑張ってくれたみたいだからな。今日は休ませてもらおうと思って。」

「昨日？昨日なんかあったか？」

「掃除とか洗濯とか、野菊がしてくれたんじゃないのか？」

叫びながら自分の部屋にダッシュ!!

ヤバイヤバイヤバイ!!! 完全に見られた! ベッドの下が片付いてる!

「よ……芳樹?」

部屋の扉の所で、野菊が顔を赤くして立っている。

「芳樹……。」

「ち、違う! これは俺の友達横山って奴が……!」

「芳樹。お、俺……今からでも……」

「だ、だだだ、だから! これは友達横山が置いてっただけで、けっして俺の趣味ではない!」

「い、いいんだぜ? お、俺も少し、興味……あるから……。」

「ヤ、ヤベエ。目が虚ろだ。コイツ目覚めちった……。」

「よ、芳樹? お、俺。も、もう……!」

ギャー――――!――!――!――!

|||||

学校遅刻しちゃった。あのあとの事は・・・思い出したくない。

「よう遠藤！お前今日も遅刻かよ。留年しちまつぞう。」

ギロツ！

「な、なんだよ、怖い顔して・・・」

「…………ジャストシュマツシュ（当然の一撃）……！」

「ぼげらっ」

夏休み

「え〜。で、あるからしてっ、夏休みは非常〜っに気がゆるみやすい。」

バタッ

「なのでしっかり気を！引き締めて！楽しい夏休みをすごしまし
よう」

バタッ

「え〜、話は変わりますが・・・」

バタッ

||||| 30分後 |||||

「それでは話を終わりにします。楽しい夏休みを。」

あの野郎話長すぎるだろ。校長特権か？

「これで閉業式を終わります。一同、礼っ」

やっと終わった〜

「このあと、生活指導の先生からの連絡が・・・」

あ、意識が………バタツ

|||||

「……くん……藤くん……遠藤くん！」

「うおえ？」

「あ、気づきました？」

「多分」

「よかった。ナツが「鬼がついてる」なんて言うからしんばいしちやいました」

「うん？どんな状況だ？」

「閉業式で倒れた」

「うわっ！」

「失礼な反応だ。芳樹。」

「そうですねよ遠藤くん。ナツにお礼を言わないとダメです。倒れた遠藤くんを保健室まで運んできてくれたんです」

「憂も手伝った。」

「ああ、思い出した。校長のせいで倒れたんだ。」

「で、今日倒れた人数は？」

「あなたを入れて23人です」

いつもより少ないか。

「軟弱だな、芳樹。」

「うるせえ」

勝手に話を進めているが、コイツらの事を紹介しないとな。

まず、この敬語を使うのが瀬野崎せのさきゆづか憂佳。

で、もう一人の背の低い、無表情がナツ（本名不明）。

二人は仲が良く、小さな頃からの友達らしい。ちなみにナツの本名は瀬野崎しか知らないと言う噂がある。

瀬野崎は面倒見が良く、ナツのお姉さんみたいだ。そしてナツは口数が少ない不思議系。オカルトが好きらしい。

「黒魔術とかやってる」

と自慢気に言ってきた事がある。嘘だろうとバカにした次の日、捻挫したのは偶然だと信じたい。

二人ともクラスメイトで、ナツが俺になついていた事がきっかけで、瀬野崎とも話すようになった。

「なあ瀬野崎、今どんな状況？」

「今校内にいるのは私たち3人と先生だけです。」

「マジ？」

「マジです」

「芳樹のせいだぞ」

「なんでだよ」

ナツはいつもいきなり話に入ってくるな。

「じゃあもう帰りましょうか。先生方に迷惑かけてしまいますし」

「帰ろう」

「そうだな。遅くして悪いな、瀬野崎。」

「いえいえ」

「ナツにも謝れ、芳樹」

「やなことだ」

「フフフッ」

|||||

「じゃあまた、夏休み明けに」

「はい。遠藤くん」

「うん、バイバイ、芳樹」

「バイバイ」

さて、帰るか。

お被い

「ただいま」

「おかえり芳樹」

「おかえりなさいませ、芳樹様」

・・・あれ？何か多くね？

「お邪魔しております、芳樹様」

「あ、ええと、どちら様？」

「陰陽師だとよ。俺を被いにきたんだと。」

野菊が不機嫌そうに答えた。

「この野郎二時間ぐらい前にいきなり来て、

「あなたを被います！」（ものまね入ってる）

とか言いやがった。どついう事だ？なんで知らない奴にドア開けた瞬間死ねって言われなきゃなんねえ。」

大分怒ってんな。しかも似てねえし。

「ええと、とりあえずお名前は？」

「申し遅れました、わたくし、陰陽師の花開院椿けいかいんつばきと申します。」

「えと、椿さん。ご用件は？」

「この家に取り付いた鬼を祓いに来ました。」

「その鬼と言うのは野菊ですよね？」

「はい。」

何かこの人怖いな。

「おい何やってんだ芳樹。そんな奴早く追い出せよ。」

「だまりなさい魔性ましやうじやうの物。あなたとは話をしていません。」

「なんだとクソ女！」

「おい落ち着け！」

身を乗り出す野菊を止める。野菊と椿さんは気が合わないらしい。当たり前か、鬼と陰陽師だからな。

「と、止めるな芳樹！俺はやらなくちゃいけないんだ！みんなが！みんなが待っているんだー！………たはっ！」

言いながら倒れるモーション。こいつ俺のマンガ勝手に見やがった。

「何ふざけているんですか。」

そして椿さんの冷たいツツコ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

椿さんは野菊を被うために、わざわざ京都から来たらしい。椿さんの家は代々陰陽師をしていて、椿さんはそのあととりになる修行中らしい。椿さん曰わく、野菊は早く被わないと俺が不幸になるらしいんだが……

「ですから、今すぐお被いしましょう。それがあなたのためであり、野菊のためなのです。」

「勝手に決めんなクソ」

今日の野菊はことさら機嫌悪いな。

「被うっていうと、野菊はいなくなってしまうんですね?」

「はい。被う＝殺す、と思ってください。」

イヤイヤイヤ、怖いって。なんで静かな顔でそんな事言えるんだ。

「まったく、なんて野郎だ。まるで殺人鬼だな。」

「殺人鬼? 鬼はあなたでしょう?」

「なんだと!?!」

「まてまてまて！」

さつきと同じパターンじゃねえか。

「……すみませんが椿さん、お祓いは遠慮します。」

「え？」

驚いた顔だ。

「で、でも、早く祓わないとあなたが不幸になりますよ？」

「なんて言うか、今野菊がいなくなる方がやなんですよ。どんな不幸かわかりませんが、野菊がいなくなる事が不幸なんじゃないかなど。」

「キヤー！芳樹イイ男っ！」

うるせえな。

「つーわけだ、陰陽師！とつとこ京都に帰れ！ほれほれ、上洛じやー！」

「調子に乗りすぎだ。」

ゴツンッ！

「いつっ」

「なんだとつとこつて。ハム太郎か。」

「いいじゃんか。」

「……んんんんんん」

あつ、椿さんいるの忘れてた。

「いいんですか！？不幸になるんですよ！？」

「え、ええ。」

「……そうですか。なら、いいです。」

「すみません、わざわざ京都から来てもらったのに。」

「明日も来ます！」

「え？」

「明日も来て説得します。」

「また京都から？」

「今日は近くで宿を借りていますから。」

「マジかよ」

「それではまた明日。失礼しました。」

と言って椿さんは出て行った。

な。

明日は野菊を病院に連れてく予定なんだけど

診察

「よしっ、じゃあいくか。」

「どいじょ？」

「病院」

「いつてら〜」

「いつてき〜。椿さん来たら被われないようにきをつけるよ」

「やっぱいつてやるよ」

「よしおっけ」

野菊も椿さんは苦手らしい。まあ、自分を被おうとする人を好きにはなれないか。

病院へは電車で10分ぐらいだ。野菊は初めての病院&電車だが、まあ大丈夫だろ。普通にしていれば。

「こんなんじゃない俺はとめられないぜ！おりやつ！」

「馬鹿、改札飛び越えんな！」

先が怖いな〜。マジ静かにしてくんね〜かな〜。

そんな事を言ったらもう着いた。案外、野菊は静かだ。

「おい野菊、ここでおりるぞ」

「お、おう」

難なく、いや電車おりるだけで難があるわけないか。と思ったが
現実をあまくない。

「よ、芳樹……。」

「ん？何だ？」

「よ、酔った……おうえっ」

「わわわわっ！まで！ここで吐くな！」

なんで電車で10分ゆられただけで酔うんだよ！てか電車そんなに揺れなかったんじゃね？

「兎に角便所だ！便所にいくぞ！こい！」

急いでトイレにきた。

「ここで待ってるから行ってこい！」

「んん！いつしょにきて！」

「馬鹿女子便だろ……っついてて！髪の毛ひっぱるな！」

〃 〃

「よ、芳樹・・・。ダメだ、こんなところで。せまいよぉ。
んあぁっ。だ、ダメ。もう我慢出来ないっ。俺、もおっ・・・。

オエエエエエエエエエエエエエエエエー———」

うわきたねっ！見ちった。俺もはきてえ。

てか何でこの野郎、俺をひっぱってきやがった。でも野菊が男子
便に入ってくれてよかった。野菊は・・・別に気にしないだろ。

「ううー。気持ち悪い〜。」

「多少は楽になったる。もういくぞ」

野菊の手を引いてトイレを出ると、そこにいる全員が俺を睨んで
いる。ここ男子便だよな？普通野菊を変な目で見るだろ。

野菊を見ると、虚ろな目で下をむき、顔を赤くしている。

「わ、私、オトナになっちゃ・・・。」

「黙れ」

〃 〃

以外にも診察は早く終わった。その理由が・・・

「あゝムカツク！何なんだ！電車で酔いながらはるばるきてやったのに解らないって！医者だろ！？」

「まあまあ、落ち着けよ。医者にも解らないことあるんだよ」

「しかも聞いた？」様子見しよう「っってもう様子見てきたんだよ！」

「わかったわかった。なんか買ってやるから」

「服買え」

男っばいんだか女の子らしいんだか・・・。

服

さて、無事診察も終わって帰りたい気分だがそうはいかない。野菊の服を買う事になった。

思えば野菊は自分の服を一着しか持っていない。

普段は俺の服を着て、今日みたいに出掛ける時は自分の服を着る。勝手に俺の服を着るのはどうかと思うが、上手く着こなして全く違和感がない。

まあ、とりあえず適当な物を買おう。男用の服でもいいだろ。いい感じに着てくれるし。

「おい芳樹、こんなのはどうだ？」

「あーあ、いいんじゃないのっ」

「ちゃんと見ねーと爪剥ぐぞ？」

何でそんな怖い事が簡単に言えるんだか。

「お前なら大丈夫だろ、何でも似合うし……え？」

「そうか！？似合うか！？まさか芳樹からそんな言葉がでるとは思わなかった！よし決めた！これにしよう！」

「いやいやいや、いや、いやいやいや。それはどうよ」

「あんだよ、何か文句あるか？」

嬉しそうな野菊の手には白と水色のかわいいフリフリワンピース

がある。

「芳樹が似合うなんていつてくれるなら、俺毎日これ着ちゃうかもっ！」

うわ。超嬉しそうだよ。迂闊に似合うなんて言うんじゃないかな。もうちょっとクールな奴買うのかわと思ったら、白と水色のフリフリで。

「おい芳樹っ、何してんだ、早くしろっ」

「な、なあ野菊。まだ時間あるしもうちょっと見てみないか？」

「まさか芳樹がそんな事言ってくれるなんてっ。今日の晩ご飯は何がいい？何でも頑張っって作ってやるぞ？」

メツチャ女の子やん。話聞いてねえし。

まあ、こんなに喜んでるんだからいいか。そこまで変でもないだろ。

「化け物がそんな物を着るのですか？」

「ああん？」

ゲッ、この声は……。

「何だよ陰陽師。テメエこそ陰陽師らしく巫女服でも着てる。キモマニアなら喜ぶぜ？芳樹とかな」

「陰陽師は巫女服なんて着ませんわ。でも芳樹様が喜んでくださ

るなら着ようかしら。あなたから芳樹様を奪いとってあげますわ」

この二人、仲の悪さが普通じゃないな。しかも勝手に人の好み決めやがって。いや嫌いじゃないよ？むしろ好きだよ？

「お前じゃ奪えねえよ。それに芳樹は俺の事が好きなんだ。他の女になびいたりしねえ。行くぞ芳樹」

「お、おう」

「申し訳ありません芳樹様。家にお伺いしようと思ったのですが少しやる事が出来てしまいましたので、後日に致します。」

「あ、はい。じゃあまた今度」

「別に来なくていいぞ。その方が平和そうだからな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん。」

？椿さんがなんか困ったような顔だ。いや、悲しそうな顔か？どっちにしても気になるな。

「芳樹様」

「何ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・野菊と生きるなら、覚悟はしておいてください。とりあえず・・・・・・・・今日あたり・・・・・・・・」

「え？」

角

「ただいまー」

「おかえりー。ただいまー」

「おかえりー」

もうこんな時間か。

色々、主に野菊の電車酔いなんかで大分疲れたがなんとか帰ってこれた。

もう風呂入って寝たい気分だが、野菊が夕飯を作ってくれるらしいので少しだけ待とう。どうせ明日も休みだから遅くまで起きていてもいいだろう。明日は一日中寝る事になるだろうけど。

「芳樹、風呂入ってるよ。その間に作ってるから」

もう風呂の用意してくれたのか。

最初は、いきなりこの家に住ませるとか言われて迷惑だったが、こういう所は凄く感謝してる。

召使いになれとかいってたけど、あれは多分素直に泊めてもらうのが恥ずかしかったのだろう。結構かわいい所があるんだ。

「おい聞こえたか？早くしろよー。それとも一緒に入りたいのかー」

「今はいるよー」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何かオカンみたいだな。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

あー、良い湯だなーアハハ。

最近気づいたけど、耳を洗い忘れたら気になりすぎてどうしようもない。前に洗い忘れた時なんて服着た後なのにまた脱いで洗ったぐらいだ。それぐらい気になる。

まあいいや。それにしても良い湯だな。…………。

今日椿さんが気になる事を言っていた。

野菊と生きるなら覚悟をしる。とりあえず今日あたり、と。

勿論覚悟はしている。野菊は鬼の娘なのだ。

普通なら追いつ返す所だろうが、何故か野菊を助けれないといけな気がした。

野菊は凄く俺のためにしてくれている。

だから俺も何かしてあげたい。少し怖いけど、一番野菊のためになるのは、野菊のなくした記憶を思いださせる事だろう。

そういえば、野菊を殺した男の子孫がいるという噂があったな。

……………やはり気がひけるが、少し調べてみるか…………。

のぼせそうだからもう出るか。

ボタンー！

なんだ？今の音は。野菊か？

《覚悟はしておいてください。とりあえず、今日あたり》

《とりあえず、今日あたり》

！！

「野菊！」

|||||

急いで風呂をでて台所にいくと、野菊が頭を抱えてうずくまり、悶えていた。

「大丈夫か！どうしたんだ野菊！！」

「ああア！！ヤ、ヤメローー！！」

あ、頭がーッ、わ、割れる、ヤメロツ！
でてくるなア！！」

野菊の目は白目を向き、涙がにじみ出ている。

「おい野菊！！どうしたんだ！！大丈夫か！？」

「よ、芳樹！助けて！！イヤアッ！だ、ダメだ！早っ、早くッどっかイけ！に、逃げるッ！早く！！」

野菊は白目を向いたまま叫んでいる。

俺の方を見ていない。いや、俺がどこにいるか分からないんだ。ただがむしゃらに、必死になって叫んでいる。

俺はどうしていいか分からない。

「は、早くッ、お願いだから早く逃げてくれ!!」

「一体どうしたんだ!お前がこんななのに逃げれるか!」

「お、お願いッ、お願いだからあ!!」

見間違いだろうか。頭を押さえる野菊の手の隙間から、尖った白い物が出てきている。

「あ、あアッ、よ、芳樹、逃げるオッ」

俺はどうすればいいのだろうか。

野菊のために何かしてあげたいが、どうすればいいのかわからない。

何も出来ない自分が悔しい、憎い。

「逃げて、芳樹。た、頼むからッ、逃げて……………」

ゲアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！

目の前の野菊、いや、これは野菊か？

髪を振り乱し、頭には角が生え、尖った爪を見せ、
牙を剥き出しにした、まさに鬼が目の前に立っている。

だがその鬼の目には悲しい涙がにじんでいた。

鬼

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

目の前の鬼は叫んでいる。
だが、その叫び声は悲鳴にも聞こえる。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

ブンッ

「うわっ」

鬼は手にもった包丁で切りかかってきた。

「ガアアッ、フーツフーツ、ウアアアアアッ!!」

ブンッ、ブンッブンッ、ブンッ。

「うわっ、うわわっ！や、やめる！落ち着け野菊!!」

そうだ、鬼ではない。野菊だ。

野菊はいつでも俺のためになってくれているんだ。

暴走する、俺を殺そうとする鬼を、野菊は泣き叫びながら止めよ
うとしている。

グサッ

「ぐあぁっ！」

包丁は俺の背中を貫いた。

「だ、大丈夫。もう大丈夫だ、野菊。心配するな。俺がいる。」

いつでもお前を止めてやる。

すまない。お前を苦しめてしまつて。

でも、もう大丈夫だ。

お前が俺のためになつてくれたように、

俺もお前のために、何でもする。

そのためなら、腕も背中も痛くない。

それ以上に、野菊が苦しむ事の方がつらい」

「グ……、グアアッ……」

抱きしめる力を少し強くする。

「だから、これからは二人で頑張ろう。」

お前の中の鬼が暴れたら、俺が絶対止めてやる。

お前のためなら、何も怖くない。

大丈夫。もう何も怖くない、心配しなくていい。

苦しまなくて、いい……」

野菊が俺の腕の中で泣いている。

「……………ウ、ううう……………あ、ありがとう芳樹。」

「泣くなよ、らしくないな。」

お前にはもっと、もっといっぱい笑ってほしい。
もっといっぱい、お前の笑顔が見たい」

「う、うん、うん！」

わ、わかった。

いっ、いっぱい……………笑うから、もっといっぱい、
いっぱい笑うからッ」

……………
「……………」

見舞い

「体調はどうですか？芳樹様」

「もう大分良くなりました。いつもすみません、椿さん」

「いえ、芳樹様のためですし、それに……それに、私がもっと注意していたらこんな事にはなりませんでしたから」

「い、いえいえいえ！椿さんの言うことを聞かなかった俺が悪いんですよ！椿さんのせいじゃありませんよ！」

「ありがとうございます。でも、陰陽師として恥ずかしいです。事件を未然にふせげなかったのですから」

「すみません」

「いえいえ！芳樹様のせいではありませんから！」

「あ、」

「ハハハ、」

「ふふふっ」

あの後、心配した椿さんが駆けつけてくれて俺は病院に運ばれた。幸い命に別状はなく、あと三日間もすれば退院できるそうだ。

入院生活は暇じゃないかと思っただが、椿さん、瀬野崎とナツ、ついでに横山なんかが見舞いに来てくれてさほど暇じゃなかった。

ただ心配なのが……、

「あの、椿さん。野菊はどうしてますか？」

「……今日も、来てないみたいです……」

「そ、そうですか、まあアイツ料理できるから飢え死にはしないでしょう、アハハハッ」

「……………」

|||||

芳樹様が入院したあと、野菊は一度も芳樹様のお見舞いに行っていない。

自分のせいで入院させてしまっただけで会いづらいのでしょうけど、芳樹様がそんな事気にしていない事くらいわからないのかしら。

陰陽師が鬼の心配するのもおかしいけれど、芳樹様も気にしているので少し様子でも見てみましょう。

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………いないのかしら」

ピンポーン

「野菊ー、私よー、椿よー」

ガチャ

あら、ドアが開いてる。やっぱりいるじゃない。

「野菊ー、勝手に入るわよー？」

返事はない。まあ入っても大丈夫でしょう。

「おじゃましてーす」

変わってない。前来たときと全然変わってない。

靴の置き方、半開きのドア、空気すら変わってない。

嫌な予感がする。本当に変わってない。まさか……………！

「野菊ー！！」

急いで台所にいくと、血の付いた包丁を持った野菊が膝を抱えてうずくまるように座っていた。

「何やってるのよ野菊ー！！まさかあの日からずっとこのままでいたわけ！？」

野菊の手足は青白く変色している。間違いない、ずっとこのままでいたんだわ。

「とりあえず立ちなさい！何か作るからまって！」

「……………いらぬい」

「何言ってるのよ！あれから何も食べてないんでしょ！？何か食べないと死んじゃうわよ！？」

「いらぬい」

「ダメよ！ちゃんと食べないと……………」

「いらぬいっていつてんだろ！！腹減らねえんだよ、あの日から！！ずっと何も食べてねーのに全然腹が減らねえ！全然動いてねーのにどこも痛くならねえ！なぜだかわかるか？俺が鬼だからだ！化け物だからだ！」

「野菊……………」

「頭の角もはえたままなんだ。芳樹に会いたい。怪我の看病もしてやりたい。でもこんな角があつたら芳樹に会わせる顔がないだろ！化け物のまま、芳樹に会えるわけないだろ！」

またお腹が減った時に芳樹のクソ不味いオムライスが食べたい！芳樹が買ってくれた服と一緒にデートしたい！でも、もうダメなんだ。腹は減らねーし角ははえたままだ。芳樹のオムライスも食べねーし、芳樹が似合うつて言ってくれた服も、角があつたらきれねえ。俺は、もう化け物なんだ」

「・・・・・・・・あなた、馬鹿？」

「ああ!？」

「芳樹様がそんな事気にすると思う？芳樹様はあなたが鬼とわかつた上で一緒に住んでたんでしょ？それをいまさらなによ、角がはえたくらいじゃ芳樹様はきにしないわ」

「てめえなんかになにがわかる!！」

「じゃあ自分で確かめればいいじゃない。角のはえた頭で芳樹様が買ってくれた服をきて、芳樹様に会ってみればいいじゃない」

「・・・・・・・・」

「私もう帰るわ、元気になったみたいだし。お腹がすかなくても一応何か食べなさい。自分で作れるんでしょ？芳樹様がいつてたわ。それともうすぐ退院できるみたいだからちゃんと片づけしておきなさいよ?」

「・・・・・・・・言われなくてもちゃんとやらあ」

「そう、じゃあまたね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あーっ、退院だ!!」

俺は伸びをしながらいった。まわりで何人かがへんな目でみたがきにしない。気にしたら心折れそうだし。

「退院おめでとーさん、遠藤くん」

「お世話になりました」

「もう来ないようにするんたぞ」

「はい」

何か犯罪おかしたっけ？

まあいいか、これから自由だ。思いっきり遊ぶぞー！

……結局、野菊は一度も見舞いに来なかった。

椿さんの話では元気らしいけど、やっぱり心配だ。

「芳樹様」

遠くで椿さんが手を振っているので恥をかかないように急いで駆け寄る。

「椿さん、来てくれたんですか？」

「はい、退院おめでとーございます、芳樹様」

「ありがとうございます」

「いえいえ、じゃあ早速帰りましょうか」

「はい。そういえば、椿さん京都に住んでるんですよね？ずっとホテルに泊まってるんですか？」

「その話は今度改めてお話いたします。今日は芳樹様の退院をお祝いしましょう？」

「あ、はい。ありがとうございます」

違和感がある。そして恐怖感も。椿さんの様子がおかしい気がする。何かあるな。

|||||

家につくと、今まで前を歩いていた椿さんが俺の後ろにきた。

「どうしたんですか？」

「いいえ、何でもありませんよ？」

あゝ、わかつちった。これは多分、玄関開けたらクラッカーが鳴って、「退院おめでとー」だな。

横山とか瀬野崎とか呼んでくれたのかな？

ありがたい話だ。俺の退院を祝ってくれるなんて。

よし、クラッカーの音に驚かないようにしよう。凄くクールに入

ってかっこよく決めよう。よしよし、いくぞ！

ガチャ

「ただいまー……あ？」

どうした？クラッカーの音がしないぞ？

「お、おかえり、芳樹。退院おめでとう」

「あ、どうも……」

クラッカー+ゆかいな仲間達のかわりに、白と水色のフリフリなワンピースを着て、頬を赤くした可愛い女の子がいる。そしてその女の子は、頭に角がはえている。まさか……。

「えーと、間違ってたら悪いんだけど、その……野菊？」

「……………うん」

「エエエエエー……！！！！！！」

大声だしちった。でもなんだって？この子が野菊！？
信じられん、野菊ってこんなにかわいかったか？

いや、嘘だろ。野菊つてもっと、なんかこー、ちがったもん。

「本当に野菊ですよ、芳樹様」

「へ？」

「そ、その、退院祝いに、色々作ったから、その、食えっ」

「か、かわいい」

「えっ？」

やべっ、声に出ちった。

「よ、芳樹、今かわいいって……」

「い、いや、さっきのは」

「よしき……!……!……!」

「わ、馬鹿っ、抱き付くなっ!!」

「ふふふっ、今だけは良いじゃないですか、野菊の好きにしてあげても」

・・・そうだな。俺も少しだけ、こうしていたい。

party

「はい、あ〜んっ！」 これ野菊。

「あ、あーん」 で、これ俺。

「……………」 「これは椿さん。

「うまいか？」 また野菊。

「う、うん。んまい」 で俺。

「……………」 「つい溜め息が出る椿さん。

「じゃあもうイチヨ！あ〜んっ」 ハイテンション野菊。

「あ、ああ」 これまた俺。

「……………」 あの「 そうだ椿さん。早く言ってくれ。

「どうした？芳樹」 いやいや野菊さん。

「あ、あのさ」 もうそろそろや。

「ね、ねえ野菊？」 そうだよな？椿さん。

「早く食べよ、芳樹っ」 もういいよな？

「ジブンデクエルカラー！ツバキサンモイルカラー！」

「え？」

「え？じゃねえよ！」

「あ、ありがとうございます、芳樹様」

|||||

なんかかんやで退院祝いパーティーを開いてくれた。

パーティーと言っても、俺、野菊、椿さんの三人で小さいテーブルを囲んで、野菊の手作り料理を食べただけだが。

それでも十分嬉しい。久々に野菊に会えたんだ。元気そうだし、俺が買った服も思った以上に似合ってる。

背中も結構早く治ったし、いやいや、本当によかった！

「……………お、おい芳樹。な、何とも思わないのか？」

「なにが？」

「俺、芳樹の事刺しちゃったんだぞ？」

「ああ、その事か。あの時言っただろ？俺は大丈夫だって」

「俺、角もはえたままなんだぞ？」

「いや、角って普通ひっこむのか？」

「俺の事、怖くないか？」

「はははっ、怖いわけないだろ？むしろかわいいし」

「芳樹く〜。．．．．．大好き！」

「こ、こらっ、いきなり抱きつくなよ」

「いいじゃんかつ、久しぶりなんだから〜」

「．．．．．バカップル、ですか」

あ、椿さん居るの忘れてた。

「ここまで仲がいいと、見ているこっちが恥ずかしいです」

「す、すみません」

「なんだ椿、餅でもやいてんのか？」

「こら野菊っ」

「……………すこしだけ、ね」

え？

っーか、前より野菊と椿さんの仲が良くなってる気がする。何かあったのか？

まあ仲がいいのは良い事だ。人間って言うのは友情で成り立っているんだ。

ピンポーン

お客さんか？誰だべ。

「芳樹様は座っていてください。私が出ますから」

「あ、ありがとうございます」

椿さんはすぐに戻ってきた。

「誰でした？」

「男性でしたが間違えたみたいです」

家を間違えるのも珍しい。団地だからかな？

ピンポーン

まただ。

「今度は俺が行ってやるよ」

「悪い野菊」

そしてまたすぐに戻ってきた。

「誰だった？」

「女が二人。間違えたって」

二連ちゃん。少なくとも隣の家とは似てないと思うけど。

ブルルルル---

電話だ。次は俺の番だな。

「もしもし、遠藤ですが」

「（芳樹か？俺だ、直哉）」

直哉？誰だ？俺知らないぞ？

「えーと、どちら様？」

「（とぼけるなよ、俺だ。横山直哉）」

横山？俺の知ってる横山は・・・ああ、横山か。クラスメイトの。

「（もしかして芳樹、俺の名前忘れてた？）」

「そんな事ねえよ、ちゃんと思いついた」

「（忘れてたんじゃねえか！）」

うわっ。電話で大声だすなよ、耳いてえ。

「で、何のようだ？」

「（いやさ、お前の退院祝いやろうと思って、瀬野崎さんとナツツンつれてお前んちの近くまで来たんだけどさ、お前の家分かんなくなっちって）」

「勝手に人んちで祝おうとするなよ。今どこだ？」

「（お前んちと間違えて二回もピンポンされた不幸な家の前）」

まじかよ。一回目が男で二回目が女二人って言うってたな。横山と瀬野崎とナツ、完全一致じゃねえか。

「その不幸な家をもう一回不幸にしてやれ。じゃあな」

「（お、おい芳樹っ……）」

ガチャッ

玄関でまつか。

ピンポーン

「はい」

「うわっ、何でいるんだ？」

「俺の家だから。まあ入れ」

|||||

「いやー、まさか芳樹に女の友達がいるとは！つい家を間違えた
と思ったぜ」

「遠藤くん、私達以外にもお友達いたんですね」

「良かったな、芳樹」

この三人、横山と瀬野崎とナツは仲が良いのだろうか。

「おい芳樹、コイツら誰だ？」

野菊様が若干イラついてらっしゃる。

「えーと、クラスメイトの横山と瀬野崎とナツだ」

「「「よろしく」」」

三人揃ってあいさつ。

「よろしくお願ひします、開花院椿です」

丁寧に返す椿さん。

「けっ」

不愉快そうな野菊。

「おい野菊、ちゃんとあいさつしろよ」

「ああ？」

コイツの沸点はどんだけ低いんだ

「じゃあねえな」

そうそう、ちゃんとあいさつしないと。友情はあいさつからだぞ。

「芳樹の嫁の野菊だ」

おい野菊っ！嫁はダメだろ！

「おいおい芳樹く、友達どころか嫁までいるのかよ」

「遠藤くんのお嫁さんですか、うらやましいです」

「角はえてる。鬼嫁」

「「「ええええええー……………！！！」」」

マジで仲良いな。説明がめんど

くおそつだ。

友情

「さあ、説明しろ芳樹」

「大丈夫、私は遠藤くんを信じてるから」

「信じてるぞ、変態芳樹」

もつめんどくせーよ。特に最後の奴が。

だがしかし、ここで説明を怠れば、俺の残り少ない学園生活が台無しだ。

野菊にあいさつしろなんて言うんじゃない。嫌までよ？まさか、こうなる事を予想して真面目にあいさつしたんじゃないだろうか。いやいやいや、何考えてるんだ俺。野菊は俺の事を夫だと思ってくれてるんだぞ？そんな野菊を俺は疑うのか？

きつと、野菊もこの状況をどうにかしようよ………笑ってやがる。あの野郎はめやがった。

「お前がこんな奴だとはおもわなかった」

「野菊さんのご両親にもちゃんと謝らないと、遠藤くん」

「死んで償え、変態」

もうガンガン来てるよ。完全に俺が悪者じゃん。じゃあねえ、良い感じにいいつくろうか。

|||||

「つーわけだ。俺は断じて悪くない」

俺はほとんどの事を話した。

どうして出会ったか、何故この家に住む事になったか、野菊が何者か、今回俺が入院した理由。

自分でも驚く程、口から言葉が出てきた。あとはこいつらが信じるかだ。

「ま、マジかよ」

「し、信じられません、そんな事が……」

「……………」

まあ、当然の反応か。こんな話、信じる方がどうかしてる。

「……………今話した事は全部忘れてくれ」

そつだ。それが一番良いのだろう。今更だけど、これは俺と野菊の問題だ。こいつらを巻き込むわけにはいかない。

「……………ナツは信じるぞ」

え？

「ナツツンだけじゃねえぞ。俺も信じる」

「わ、私も信じます!」

「な、なんでだよ。なんでこんな話信じるんだよ」

聞いてはみたが、本当は知っている。

俺達は友達じゃないか。固い絆で結ばれた、友人じゃないか！

そんな友達の言う事を、何故疑う必要がある？

そつだ、俺達は友達だ！

「何故信じるかって？そんなの当たり前だろ？」

ああ、ありがとう横山。

「そつですよ、遠藤くん。当たり前です」

ありがとう瀬野崎。

「決まってるぞ、芳樹」

ありがとうナツ。

「だつて」

「だつて！」

「だつて！！！」

そつだ、俺達は！

「野菊さんに角はえてるじゃん」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

「野菊さんに角はえてたら、大体の事が真実だろ」

「付けてる感じしませんもの。ねえ？」

「うん、妖気、感じる」

あれ？友情は？

固い絆で結ばれた友人は？

友情より角二本？

「良かったじゃねえか芳樹、話の分かる友達だよ」

「すごいです。こんなに簡単に妖怪の存在を信じる人なんて、陰陽師やってて初めてです」

待ってくれ。状況が良くわからないんだが。

「よしっ！じゃあ退院祝いパーティー再開だ！とりあえず自己紹介、芳樹のクラスメートの横山直哉でっす！」

「遠藤くんのクラスメートの瀬野崎優花です」

「芳樹の腐れ縁、ナツ」

あ、友達って言葉が出なかった。リアルで心が痛い。

「芳樹の嫁の野菊だ」

「陰陽師の開花院椿です」

………一応、退院祝いしてくれるんだよな。

「………遠藤芳樹です。野菊の………」

「家族、かな」

一日

「起きろ！芳樹！」

「起きてる」

朝から元気な奴だ。理想としては

「おはよう芳樹、良く寝れた？」

みたいに優しく起こして欲しいが、相手が野菊なら叶わぬ願いだろう。さっき想像した人おチチが大きかったし。その時点でもうダメだよな。

「背骨引っこ抜くぞ？」

あれ？聞こえてないよね？

|||||

「あー、暇だ」

何もやる事ない。こういう時には！

「寝るか」

「い、いきなり何言ってるんだよ。まだ昼間だぞ？ま、まあ、芳樹

がしたいなら・・・お、俺は、良いケド・・・」

・・・思春期か？

|||||

もう夕方だ。

「なあ野菊、晩飯何か食べに行くか？」

「おうっ、俺の作ったためしやー食べねえってー事か？」

今度は何に影響されたんだ。

「そう言う事じゃねーよ。一日中家に居たから少し外に出ようと思っただけだ」

「別に良いけど、何にするんだ？」

「野菊は何がいい？」

「俺は何でもいいぞ。ラーメンでもいいし」

「そうか、じゃあ最近出来たファミレス行くか？」

「ああ、いいんじゃないか？そこが駄目ならなあ、別にラーメンでもいいし」

「あ、イタリアンとかどうだ？初めてだろ」

「イタリアンか、初めてだ。初めてといやあ、ラーメン何かも初めてだな」

前に食ってたよ。

「……………ラーメンにするか」

|||||

「「ただいま」」

「腹いっぱいだー。もう寝るか」

「よ、夜になったからってそんなに焦らなくても……………。まだシャワーも浴びてないのに……………」

めんどくせー。

|||||

「おやすみ、野菊」

「お、おやすみ」

「な、なあ芳樹っ」

「んー？」

「き、今日は……一緒に寝ないか？」

「お前一緒に寝るて」

「ば、馬鹿！変な事妄想するんじゃねえよ！」

お前だよ。

「いいぞ、枕持って俺の部屋来いよ」

「ま、枕はいらない」

「首痛くなるぞ？」

「芳樹のを一緒に使うから……」

「……今日の野菊はやけに甘えてくるな。」

||||||||||||||||||||||||||||||||

「なあ芳樹？二人きりになるのは久し振りだな」

「そう言われればそうだな」

「ごめんな、一度も見舞いに行けなくて」

「いいよ、気にするな」

「角、はえたままだ」

「大丈夫、野菊は野菊。変わりはない」

「……………ありがとう」

「……………」

「……………芳樹……………」

「なんだ？」

「スウ……………スウ……………」

寝言か。

あ、野菊のよだれが。俺の枕なのに。

思った以上に平常心が保てない。

一週間

月曜日

芳樹は俺より早く起きていました。

「何時に起きたんだ？」

と聞くと、11時と答えました。頭がおかしくなったのかと思って、病院に行くように勧めましたが、時計を見ると午後1時でした。昨日の夜に遅くまでテレビを見ていたのが悪かったと思います。

火曜日

今日、野菊が「相方」という刑事ドラマの、頭がいい方の人のモノマネをしていました。

野菊は自信満々でしたが、正直あまり似ていませんでした。

水曜日

角はまだはえたままです。

芳樹は気にするなと言ってくれましたが、やっぱり女の子として角があるのは恥ずかしいです。

「え？女の子？」

ゴンッ

木曜日

昨日野菊に殴られた頭がまだ痛いです。
いつもいつも一方的に殴られているので、仕返しをしようとしたが、女に手を挙げるのは気がひけるので止めました。

優しい男は好きですか？

金曜日

今日もいい天気です。俺は女なのに、いや、女の子なのに一人称が「俺」です。イメージチェンジをしようと思います。

「吾が輩の名は野菊である！」

土曜日

二次元の女の子は絶対に可愛い。オタクが恋するのも当たり前だ。だって容姿、性格、スタイル、すべてがそのキャラに恋をさせる為に設定されているんだ。

だから分かるか？

「二次元に恋する奴とかキモイ」とか言う奴なんて糞くらいだ！
二次元最高！！

「芳樹？何かあったのか？浮気したと見ていいか？」

日曜日

「一週間どうだったよ」

「糞だな。吾が輩は凄くつまらなかった。芳樹のせいだ」

「吾が輩やめろよ。前の方がよかつたぞ」

「……………」

「……………」

「客が一人も来ないって芳樹、お前どんだけ友達いないんだよ」

「い、痛い、心が痛い」

「……………」

「……………」

「明日どこかいくか」

「どこに？」

「決めてない」

「……………芳樹と一緒にならどこでもいいよ。」

「じゃあ家でもよくな？」

「……………」

「今日何日だっけ」

「えーっと、31」

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」
「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」

「明日から学校だ!!!!!」

ジブノヲナゲサメル

「行つて来まーす」

「いつてらっしやーい。早く帰つてこいよー」

「おーう」

今日から学校だ。なんという爽やかな朝！

生徒もまだ歩いていない。きつとクラスで一番だろう。起こしてくれた野菊に感謝だ。

「・・・・・・・・ちよつと寄り道してもいいかな・・・」

いやいやいや、駄目だ。そうやって何回遅刻したことが。寄り道なんかせず一番で学校にいつて皆を脅かしてやろう。

|||||

「おはようございます!」

「おはようじゃありません、遠藤くん!もうお昼ですよ?新学期早々遅刻なんて・・・・・・・・この授業が終わるまで廊下に立つて下さい!」

「すみません先生、立ってます」

.....寄り道欲に耐えられなかった。

「お前初日から遅刻ってなんだよ」

「そうですね、遠藤くん。学校は朝からこないと」

「怠けるな、芳樹」

何でこいつらいつも一緒なんだよ。

「まあそんな話はいいとして、今日カラオケいかねー？」

「良いけど何人で？」

「俺と」「私と」「ナツだ」

仲良すぎてうぜーな。

「いつもと同じメンバーか。いいぞ、暇だし」

「遠藤くん、野菊さんも誘ったらどうですか？」

あー、野菊かー。

「別にいいんじゃない？歌える歌もないだろ」

|||||

「よーしっ、じゃあ歌うかー！」

「「おー！」」

っー訳でカラオケに来た。

こいつらと遊ぶ時は基本カラオケだ。
まあ飽きないからいいけど。

「じゃあまずは私からーっ！」

「よっ！瀬野っち！」

「ユーウツ、ユーウツ」

一番は瀬野崎か。瀬野崎っていったらあの曲か。

「私の歌を聴けー！！！」

ほら来た、有名なアニソンだ。瀬野崎は以外とアニメが好きらしい。女の子だからBLとかが好きなのかと思ったら、割とギャルゲーが好きらしい。

「二次元の女の子って可愛いですよね。どうですか？遠藤くん。この子なんて、凄く恥ずかしそうな顔してっ。もう溜まりませんっ！」

とか言ってたな。

・・・・・・・・・・・・・・・・割とそう言う子好きかも・・・・・・・・

「いや、楽しかった！芳樹も混ざってカラオケなんて久し振りだったな」

「そうですね、やっぱり遠藤くんが居た方がいいですね」

「芳樹、乙」

おい待て、俺の知らない間に三人でカラオケ来てたのか。俺だけ誘われなかったのか。

「まあ怪我してたんだからしょうがないよな」

ああ、俺入院してたんだって。
なんか救われたわ。

「じゃあまた明日な」

「明日は遅れちゃ駄目ですよ？遠藤くん」

「また明日だ、芳樹」

「おう、じゃあな。また明日」

もうこんな時間か。野菊待ってるだろうし早く帰る。

この声にこの音、もしや野菊、自分を慰める行為をしているのか？
あ、あり得る。良くパソコンでこっそり見る大人向けアニメであるぞ？

結婚したのに、その、夜の営みがない妻がよく、自分を慰める行為をしている。

まさにその状態じゃないか。野菊最近そう言うのに敏感だし、一応野菊は俺を夫だと思ってるんだ。

明らかにそうじゃないか。野菊は今自分を慰める行為をしている。どうしよう。チョー緊張してきた。逃げるか？一旦玄関までいてもう一度大きな声で「ただいま」と言うか？

いやいや、男としてどうよ。今まで我慢してきた自分を慰めるている野菊が可哀想じゃないか。

男として、夫として、覚悟を決める芳樹！大人になるんだ！行くぞ！父さん、母さん、俺は今から、大人になります！！

バツ！

「今まで悪かった、野菊！だがもう大丈夫だ！俺も覚悟を決めた！もう自分を慰めなくていいんだ！」

「よしっ、覚悟はいいらしいなあ芳樹。今何時だと思ってんだ？はやく帰って来いっていったよな？今まで待たせたんだ、歯が全部無くなるくらいは覚悟しろよ？」

あれ？なんか違うね？自分を慰めてるんじゃないの？

「つておい！お前何食ってたんだよ！」

「クツチャクツチャ、ガム、クツチャ」

「クツチャクツチャうるせーな！いつぱいあつたる！全部食ったのか！」

「うるせー！こんだけ待たせたんだ！ガムの10個や20個くらい無くなるはポケエー！」

「いやなくならねーだろ！いつからクツチャクツチャしてんだ！」

「朝」

「お前暇かよー！」

「暇にしたのはテメエだろ！学校なんかいきやがって！」

何言っただこの女。意味分からん。あーたまおかしーんじゃないの〜。

「とりあえず仕置きだ。このガムで窒息しろ」

こゝこいつ、こっちは自分を慰めてるんじゃないのかと心配したの〜。

「……………オニーでもしてる！」

「！」

あ、
言っ
ちや
った。
た。

名前

「じゃあな遠藤」

「おー、また明日ー」

長い一日が終わり、ついに放課後になった。いや、長かった。特に数学が。

「このあと何か用事がありますか？遠藤くん」

「よお瀬野崎。ナツとアイツ、えくと、誰だっけ？一緒じゃないなんて珍しいな」

「し、親友の名前くらいちゃんと覚えてあげてくださいよ……」

親友ね。名前なんだったっけかな。

「一緒に帰ろうと思ったたら私だけ省かれちゃったんです！私頭にきちゃいました！」

「ほおー、マジで珍しいな。瀬野崎だけ省かれるなんて。どうしたよ」

「しりませんっ！ナツと横山くんの事なんていいですから、どこかに行きませんか？」

「わかるよー、その気持ち。俺なんていつも省かれてるもん。いいぜ、遅くならなかったら」

「ありがとうございます。私達だけで楽しんでしまいましたっ」

また野菊を怒らせないように早く帰らねーと。

|||||

「到着です」

瀬野崎に連れてこられたのは、どうやらアニメのグッズばかりを取り揃えた店らしい。

見たことあるアニメもあるが、ほとんどが知らないアニメだ。多分深夜にやってるんだろな。

「遠藤くんは初めてですか？」

「まあな。ナツとか横山とかとは結構来てるのか？」

「いいえ。ナツも連れて来たことないんですよ？ここに私の友達を連れて来るのは、遠藤くんが初めてなんです」

ほー、ナツも連れて来てないなんて、これは栄誉な事なのか？

「なあ瀬野崎、」

「あ、あのっ！」

「え？な、何？」

「あ、あの、二人きりなので、ゆ、優佳って……呼んでくれませんか？」

「優佳？ああ、瀬野崎の名前？まあ瀬野崎がそう呼んで欲しいなら、別に断りもしないけど」

「え、遠藤くん、私の名前忘れてました？」

あらら、みるみるうちに瀬野崎が小さくなった。
化学反応かしら。

「い、いやいや、忘れてないですよ？瀬野崎の名前はちゃんと覚えてるよ？」

「優佳って呼んで下さいっ」

「あ、ああ。えーと、優佳？」

「あっ、ああ〜んっ」

うわっ、なんかすげー色っぽい声出した。

「え？あっ、すみませんっ！」

そしていきなり謝った。

「……実は私、ナツ以外の人に名前で呼んでもらうのって初めてなんです。だ、だから、その、少しいい気分になっちゃって」

「へー、そうなんだ、優佳」

「ああんっ！・・・あ、す、すみません」

「いや、気にしなくていいよ、優佳」

「はあんっ！」

「じゃあ店の中見てみるか」

「あ、あの遠藤くん？やっぱり名前で呼ぶのは・・・」

「優佳」

「あは〜んっ！」

やべえ、大分おもしれえ。

「大丈夫？顔赤いよ？優佳」

「ああんっ！や、止めて、も、もう、私・・・」

「どうしたの？優佳」

「あああああ〜〜〜んっ！・・・！」

うわばっ、思った以上に声出しやがった。周りの人全員こっち見てる。

「ブビビッ」

「テメエ写メ撮んなキモオタ！ブヒヒッて言つなブヒヒッて！」

やばい、一刻も早くここから立ち去らないと。

「おい、一旦場所変えよう！立てるか？優佳」

「はうああんっ！わ、私、おかしくなっちゃっくん！」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「ご、ごめんなさい遠藤くん」

「いや、俺も調子に乗り過ぎた。ごめん」

その後、立てなくなった瀬野崎を抱えて近くのファミレスに入
た。

何人かが不振そうな目で見てきたが、人たすけ全部をしていると
自分に言い聞かせ何とかここまでたどりついた。

「もう落ち着いた？」

「はい、すみません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺が悪いから」

「違いますっ、遠藤くんのせいじゃありません。私が名前で呼んでなんてたのだから……」

「……………」

「今日は帰ろうか」

「そ、そうですね。今日は帰って落ち着きたいです」

「家まで送ろうか？」

「いえいえいえ！そんなに迷惑かけられません！」

否定はえー。

|||||

「今日はすみませんでした」

「いや、マジで俺のせいだから。気にしないで」

「……………すみません。じゃあまた明日、遠藤くん」

「おう、またな優……」

「んづっー！」

「せ、瀬野崎」

「……あ、あの、私、名前で呼ばれるのなれますから、また名前で呼んでくださいね？」

「ああ、協力するよ。じゃあな、瀬野崎」

「はいっ、ありがとうございました、遠藤くん！」

ささくで帰るか。この時間なら怒られまい。野菊に何か買っていつてろっかな。

止めよ、金ないし。

||||| 翌日 |||||

「よう遠藤、朝からいるなんて珍しいな」

「豊、ぶる」

「よお、横山、ナツ。昨日どこ行ってたんだ？大変だったぞ」

「まあ色々あるんだよ。それより瀬野崎が妙にご機嫌だったけど何かあったのか？」

「優は芳樹と二人きりになれたから嬉しいんだ」

そんな事もないと思うけどな。

「まさか芳樹、野菊さんがいるのに瀬野崎とイイ事やっちったんじゃないのー？」

「許さない、芳樹」

「それはねーよ」

あるわけないよ。

「おはようございます、横山くん、ナツ」

「おう、おはよう瀬野崎」

「優、おはよう」

噂をすればなんとやらだな。

「おはようございます、遠藤くん」

「おはよう、優佳」

「おお、芳樹が瀬野崎の事を名前でごんごん！」

「んあつ！だ、ダメ、ですよ、みんな見えますから」

「ああ、ごめん、つい……」

「名前を呼ぶだけで感じさせるとは……。凄い事やったんだな。いや、感じさせるという事は……まさか今も!?」

「芳樹、不潔。優、淫乱」

「テメエ等何言ってるやがる」

「いんつ、そんな言葉どこで覚えたの!? ナツ！」

「せ、瀬野崎の中にはブルブルふるえる大人のオモチヤが……」

「「入ってねえ！」

「入ってません！」」

登校

「オハヨ」

「おせーぞ芳樹、朝飯作ってあるから早く食え。そして今日は買い物いくぞ」

「ワリーけど今日も学校だ。普通学校は一週間、土日以外は学校だからお前に付き合えるのは二日間だ。次の休みまで待っててくれ」

「あゝ？なら今日は休めよ」

「あのな、休みが多いと留年しちゃうんだよ」

「リュウネン？」

「簡単に言えば、また今の学年の勉強をするんだ。ヤバければ永遠高校生って事」

「意味わかんね。つまり俺より寺子屋みてーの方が大切ってか」

寺子屋で。

「別にそう言う訳じゃねえけどよー」

ピンポン

お？こんな朝から誰だろ。

「誰か来たから話は一旦終わりだ。兎に角今日は休めないから」

「あつ、テメエ！」

誰だか知らないけど感謝だな。朝から訪問は少し迷惑だけど。

「ハイハイどちら様？」

ガチャ

「おはようございます、芳樹様」

立っていたのは椿さんだ。ただ妙なのは……

「あの、椿さん？それってうちの学校の制服じゃないですか？」

「はいっ、芳樹様とお揃いです」

あゝ、何か可愛い。朝から景気がいいな。

「実は、芳樹様と同じ学校に転校したんです」

「マジですか！？家京都じゃないんですか！？」

「野菊の事もあるのでこっちに引っ越してきたんです。

私一人暮らしになったんです」

「いつからですか？今日？」

「えーと、二学期が始まった時からですけど……」

「へー、気づかなかった。何組ですか？」

「三組です」

三組？俺も三組だよな。親友の名前を忘れる俺でも、転校生が来たら流石に気づくぞ？

「芳樹様は二年生ですよ？学年が一緒なら同じクラスだったんですけど……。残念です。」

ああ、学年が違うのか。

「椿さんは何年なんですか？」

「すみません、まだ歳を覚えていませんでしたね。芳樹様の一つ下の十六です」

「あ、俺より年下だったんですか。ずっと同じ年だと思ってました」

「そうならよかったのですが……。本当に残念です」

何か年下とは思えないくらい気品があるな。野菊もこんなならいいのに。

「何か言ったか？」

「うわっ！」

ビックリした。

「朝からなんか用かよ椿」

「ええ、今日は芳樹様と一緒に学校に行こうと思って」

「あつ、まだ用意出来てないんでちょっと待ってて下さい。急ぎますから」

飯も食ってねえや。椿さんも遅刻にしちゃ悪いから早くしないと。ちよいちよい野菊が役に立つ。

「なんだよお前も学校かよ。そんなにいいもんかね」

「ええ、凄く楽しいわよ。芳樹様と二人きりになれるし」

「芳樹はやらん」

「嫁の父かつ」

「あのよお、前から思ってたんだけどよー、芳樹と俺で話し方違くない？」

「・・・・・・・・・・」

「椿？」

「・・・・・・・・・・」

「おーい椿ー？」

「少し黙りなさ……」

「お待たせしました椿さん」

「いえいえ、全然待っていませんよ？」

「おいつば……」

「少しだけ黙って……」

「行きましようか椿さん」

「はいっ！」

「おいつ」

「じゃあ野菊、行ってくるから。戸締まりしとけよ」

「じゃあ行つてきますね、野菊」

「お、おい」

「「行つてきまーす」「」」

ガチャッ

「……………んだよ」

「……………」

「じゃあな遠藤ー」

「また明日、遠藤くん」

「じゃあな、芳樹」

「おう、また明日ー」

ついに放課後。

「……………今日は前から決めていた野菊の夫……………元、夫の祖先を探す。」

「凄く不安だが、でも野菊の為だ。本当に居るか分からないけど、でも探すだけ探そう。もう決めた事だ。」

「芳樹様、一緒に帰りませんか？」

「椿さん」

「ちようど良いかもしれない。」

「あの、椿さん」

「なんですか？」

「……………実は、野菊の昔の夫の子孫を探そうと思っんです」

「……………え？」

「野菊の元夫の子孫が居ると言う噂があるんです。少しでも野菊の為になるなら、あつてみたいとおもつて」

「……さ、さあ、野菊が待っていますよ？早く帰りましよう」

「え？あ、あのっ」

|||||

「ただいまー」

「おかえりー」

「椿さん、何か食べていきますか？」

「いえ、今日は遠慮します。明日も一緒に行きましょうね、芳樹様」

「あ、はい。送り返しましょうか？」

「いえ、大丈夫です。少しよつていく場所がありますので」

「そうですか。じゃあ気をつけて帰ってくださいね」

「はい、それではまた明日」

「また明日ー」

「……………」

「どうした野菊」

「……………何でもねえっ」

何だ？

学校！

よしっ。準備オツケだ。

ピンポーン

お、来た。タイミングバツチリ。

ガチャ

「おはようございます、椿さん」

「おはようございます、芳樹様」

「おい、野菊！。行ってくるからなー」

「……………おっ」

「じゃあ行きましょうか、椿さん」

「はいっ」

||||| 放課後 |||||

今日は俺から椿さんの教室に来てみた。

「椿さん」

「芳樹様、すみません来てもらっちゃって」

「いえいえ、登校の時は椿さんが来てくれるので」

「ありがとうございます。では、行きましようか」

「はい。あの、視線が怖いっすね」

椿さんのクラスの人の視線がスゲー怖い。
そして時折聞こえてくる……

「ねえ、あれが開花院さんの彼氏？」

「年上なんだー」

「わざわざ放課後迎えに来るなんて、亭主関白じゃない」

「実は開花院さん、本当は付き合いたくないんじゃない？」

「男の方がしつこ過ぎて仕方なく付き合ってるとか」

「うわ、サイテー」

「開花院さん可哀想ー」

散々行ってやがる。

「あの、椿さん。凄く勘違いされてますけど」

「そうですねー。こういう時は」

？

スルッ

「うわっ！」

椿さんはいきなり腕を組んで来た。

「ちよつと椿さん、これじゃもつと勘違いされちゃいますよ！本
当に付き合つてりみたいになつちやいます！」

「誤解を解く為です。芳樹様が亭主関白なんて。私が好きだから
付き合つていると思わせれば、芳樹様の誤解が解けます」

はぁいー？

「いや、それじゃ肝心な所の誤解が解けてませんよ！」

「さあ、早く帰りましょう、芳樹様っ」

ギユッ

む、胸が、おチチがあたつとる。

|||||

「おかえり芳樹ー！」

「おーっ、ただいま。じゃあ椿さん、本当に送ってかなくていいんですね？」

「ええ、大丈夫です。すぐ近くなので」

「気をつけてくださいね？」

「はい。じゃあ、明日の朝も来ますから」

「ありがとうございます。じゃあまた明日」

「さようなら」

いつも俺が送ってもらって、なんか男として不甲斐ないな。

「……………」

「どうした？野菊」

「……………あ————っ！！！！！」

「うわっ、なんだよ」

「テメエ朝から椿といちゃつきやがって！お前には俺と言っかわいい嫁がいるんだから学校なんていってねーで俺に付き合え！」

「だーかーらー、次の休みまで少し待っててくれって」

「じゃあ椿といちゃつきの止める！浮気行為だ！」

「いや、いちゃついてねーよ。同じ学校だから一緒に行くのは普通なんだよ」

「っせー！！浮気行為だ馬鹿芳樹！俺より椿の方が大事か！学校の方が大切か！」

「そう言う訳じゃねえって……」

「貴様死ねー！！！」

「うわっ、まで！どこからそんな木刀……ギャー
——！！！」

|||||

「おはようございます、芳樹様」

「お、おう、おはよう、椿」

「……何してるの？野菊」

「お、俺は芳樹だぜ？野菊なら二階で寝てるぜえ？」

「……何してるの野菊。それ芳樹様の制服
よねっ？」

「芳樹なら二階で寝てるぜっ？」

「じゃあ、野菊は？」

「野菊なら二階で寝てるぜ？」

「じゃあ、あなたは？」

「芳樹だぜ？」

「……………何してるの野菊」

「うるせえな！俺は芳樹だって言うてんだろ！芳樹が俺で野菊が芳樹！」

「あなた結局野菊じゃない！」

「芳樹だぜ？」

「黙りなさいっ！本物の芳樹様はどこ！？」

「昨日木刀で頭打って寝てる」

「絶対野菊がやったんでしょ！」

「俺は芳樹だぜ？」

「……………めんどくさっ」

|||||

「さあ野菊、なぜこんな事したの？」

「そうだぞ野菊。まだ頭いてーぞ」

「……………だつて。芳樹俺より学校の方が大事だから。俺も学校がどんな物か気になつて」

「それで俺を半殺しにして、お前が俺になつて学校に行こうとしたと」

うーん、コイツ思った以上に馬鹿なんじゃね？背もちげーし声もちげーし性別だつてちげえ。唯一同じなのが同じ人間つて事……………これもちげえ。

「つまり、学校に行きたかつたのね？」

「……………おう」

「いやー、どう考えても無理だろ。生徒じゃないと校門すらくぐれないぞ？」

「……………じゃあ俺も生徒になる！」

いやいやいや、それは無理だて。

「あのねえ野菊、学校つて思う以上に大変なのよ？週二日しか自由な日はないし、毎日勉強よ？それでもあなたは学校に行きたい？」

「おうっ」

「そう、ならいいわっ。今すぐ学校行けるようにしてあげるから

「いや無理ですよ！何勝手に決めてるんですか！」

「「？」

「いや、？じゃなくて！学校行くにも金が必要なんですよ？家に野菊を学校に行かせる金なんてないですよ！」

「その事なら大丈夫です。お金は全て開花院家が持ちますから」

「いや、でも……」

椿さんは耳打ちしてきた。

「陰陽師的にも野菊が家に一人で居るより、私や芳樹様の居る学校の方が安心出来るんです。大丈夫、開花院家で上手くやりますから」

何者なんだ開花院家。

「やったじゃねーか芳樹！俺もが野菊に行けるぜー！」

もーどうとにもなれっ。

「二日後」

「手続きは済ませました。今日からでも学校に行けますよ」

「よっしゃー！じゃあ早速行こつぜ学校ー！」

「ただし！」

「な、なんだよ」

「今日は日曜日です」

「ズッコッ」

先が思いやられる。不安しかねえ。

美少女四天王

「え、転校生の野菊さんです。野菊さん、軽く自己紹介してください」

「の、野菊だ。よろしく」

「じゃあ瀬野崎さん、勝手が分かるまで野菊さんの面倒を見てください」

「は、はい」

「野菊さん、とりあえず瀬野崎さんの隣の席に座ってください」

「お、おう」

「じゃあ次の国語の準備をして、先生が来るまで席についててください。瀬野崎さん、野菊さんの事よろしくお願いします」

「は、はい。了解です」

|||||

「はい、じゃあ授業終わりまーす。はい起立、はい礼、はい着席」

ちやくーせきってなんだよ。

お、終わった。やっと終わった。何事も無く終わった。今何時限目だ？うわっ、まだ一時限じゃねーか。なげーよ。

野菊はどうしてるっつぶせちやてるよ。まあずつとあのままなら安心だけど。

「遠藤くん、野菊さん授業中もずつとぼーっとしてましたよ」

「ああ、知ってる。野菊の事が気になりすぎて、何の授業やってたかもわかんねー」

「ア、アハハ。野菊さんに話しかけてみた方が良いんじゃないですか？」

「え〜、野菊の面倒は優佳の……」

「ああんっ！」

「わ、わりい。瀬野崎の役だろ」

「で、でも野菊さんは遠藤くんの家族……」

「わあああー！！！」

「あっ、すみませんっ！」

「気をつけてよ？その事は内緒にしてるんだから」

「は、はい。気をつけます」

「………しゃあない。話しかけてみるか」

「その方が良いと思います」

やっぱり同じクラスにしない方が良かったかな〜あ？
野菊の周りに人（主に女子）が集まってる。

「ねえ野菊さん、前の学校はどこ？」

「い、いや学校は……」

「どこに住んでるの？」

「え〜と、わかんね」

「角かわい〜。それ本物なの？」

「い、一応」

「肌モチモチっ、いいな〜っ」

「ば、馬鹿ッ。勝手にさわんなっ」

「声も可愛いよね、野菊さん」

「べ、別に俺は……」

「自分の事俺って言うんだ。何かかわいっ！」

「は、はあ？」

……ま、まあ、一応人気のようにだ。俺が話しかけなくても大丈夫だろ。

「あつ、野菊さん結構おっぱいある〜っ」

何っ？

「ば、馬鹿野郎っ！いきなり胸を揉むな！」

「私にも触らせてー。あつ、ホントだっ。おっきーい」

「あ、や、止めろっ……」

「私にもっ」

「止めろって！」

「わあっ、これ乳首？もしかして感じちゃってる〜？」

「あ、ああんっ！や、止めてっ、っ、つまむなっ」

何かAVみたいになっちゃったよ。男子も遠目で見てやがる。

「てか野菊さんノーブラ？えっろ〜い」

「え、え？ノーブラ？」

「野菊さん、夏服だからブラしないと汗かいたら透けちゃうよ〜」

「ブ、ブラ？」

「ブラジャーよ。知らない？」

「あ、ああ。椿が言ってたな」

「椿って一年生の開花院椿ちゃん？」

「お、おう。知ってたのか？」

「当たり前よ！学園三大美少女の一人だもんっ」

「ねえ、野菊さんも三大美少女になれそうじゃない？」

「だとしたらあ、学園美少女四天王じゃない？」

「うそおっ！一学期まで二大美少女だったのに、二学期で一気に四天王になるの！？」

「な、何言ってたんだ？」

あゝ、前に横山が言ってたな。

この学校には二大美少女がいて、一人は現生徒会会長、二人目は現生徒会副会長。

二人共三年で、来年二人が卒業したら美少女いなくなるって騒いでたっけ。

「よかったゝ。椿ちゃんと野菊さんいるから、二人が卒業しても学園美少女がいるじゃない」

「野菊さんは椿ちゃんと仲いいの？」

「別に」

「椿ちゃんと買い物とか行くの?」

「いいや」

「ブラの事は椿ちゃんと話すまで知らなかったの?」

「あゝ」

「へー。女の子なのに珍しいね」

「しらね」

「ブラ買わないの?」

「椿は買った方が良いつていってたけど、芳樹が買ってくんねーんだ」

「」「」「」「……え?」「」「」「」

あ、あの馬鹿ッ！何言っただっ！！

「よ、芳樹って……遠藤芳樹?」

「お」

ジロツ

し、視線が痛い。クラス全員が俺を睨んでいる。

「い、いや、違うんだ。別に俺の趣味じゃなくて……」

何言ってるんだ俺、そこじゃないだろ。

「うわっ、遠藤最低」

「ありえねえだろ、女子にノーブラ強要するなんて」

「糞ムツリーニ。死ねよマジ」

イタタタタツ、痛いなー、何もかも痛い。

「ち、違うんですっ！え、遠藤くんはそんな人じゃありません！
これには色々と訳があって……」

「そっだ優佳っ、誤解を解いてく……」

「あはうんっ！だ、駄目、止めて……遠藤くん。み、みんな
見てる……からあ」

優佳——！！！！

「うわマジ最低っ！瀬野崎さんにまで手を出すなんて！」

「いくら瀬野崎さんが優しいからって……最低！」

「同じクラスの女子を二人も人前で辱めるなんて、ありえねえよ
な糞。死ねよ」

お、終わった。俺の学園生活、今日が最終日だ。きっと明日の今は部屋の隅でうずくまってる事だろう。

ガラガラッ

「お前等何してる！もう授業中だろ、お前等の授業は科学室の筈だ！何故教室にいる！」

いきなり二人の女子、多分三年生がはいってきた。さつき怒鳴ったのは前に立ってる黒髪ストレートの女性で、その後ろには・・・おっとりとした異常に胸がデカイ、巨乳というより爆乳の女性が立っている。

「皆さん何をしているんですか？集団で授業をさぼるなんて、先生が可哀想でしょ？」

お、爆乳がしゃべった。思った以上におっとりしてる。

「申し訳ありませんっ！乙葉様！雫様！」

うわっ、どんな状況だ。俺と野菊以外、全員が土下座してる。優・
・・・瀬野崎すら伏してるよ。

「何故全員が授業を放棄している」

「何か訳があるんでしょ？大丈夫、怒ったりしないから話してみて？あ、雫ちゃんはわからないけどね？ウフフッ」

何なんだ？この二人。偉い人なのか？てか、あんたらも授業さぼ

ってるじゃん。

「それが、そこに立っている遠藤芳樹という男が二人の女子にわいせつ行為をいたしまして」

「何!？」

「まあ、思春期かしら」

いや違うんだって。発言する勇気ないけど。

「被害者は誰だ」

「瀬野崎さんと転校生の野菊さんです」

「まあ、転校早々大変な目にあっちゃったわね」

キッ

黒髪ストレートの、雫様?って人が睨んできた。今日一日でどれだけの人に睨まれなきゃいけねえんだ。

「お前が遠藤か」

「は、はい」

「お前には生徒会室で話しを聞きたい。瀬野崎、それと転校生、お前等も来てくれ」

生徒会室?もしかして……。

「なあ瀬野崎、もしかしてあの二人……」

「はい。生徒会長の乙葉さんと、副会長の雫さんです。抵抗は出
来ないと思うので、生徒会室で誤解を解きましょう」

瀬野崎がいつも以上に真面目だ。

「早くしろ、時間が無いんだ」

「は、はい。おい野菊、お前も来い」

「お、おう。なあ芳樹、あいつ等なんなんだ？偉そうな口聞きや
がって」

「それだけ偉い人なんだ。それと野菊、絶対に嫁とか言うなよ？」

「何で？」

「言った瞬間、学校に来れなくなると思え」

「お、おう」

さて、生徒会長さんと副会長さん対談だ。気合い入れて話さな
いと、一瞬の隙を取られて退学になりかねない。
本当で行かないとな。

「ね、ねえ遠藤くん」

「ん？なんだ瀬野崎」

「な、名前で呼んでくれないの?」

「……この女、誰のせいになっ
たか理解出来
てないらしい。」

退学

「遠藤芳樹、お前を退学処分にする。文句はないな」

「……はい」

「そして野菊、お前は一週間の停学処分だ」

「お、おう」

お、終わった。ついに俺の学園生活に終止符が打たれた。

良い感じにごまかして良い感じに誤解を解いて終わるつもりだったが、主に瀬野崎と野菊のせいで俺は退学になってしまった。

何故こんな事になったかと言うと……

|||||

「さあ、何故こんな事をしたのか、理由を聴こうか」

「大丈夫、乙葉お姉さんは分かってるわ。全部話して」

知っているなら話さなくていいと思うけど……。

現在、俺は会長、副会長からの事情聴取を受けている。
まさに事情聴取だ。

「ここは生徒会室らしいが、刑事ドラマでよくある机、電気スタンド、極めつけは牛丼が置いてある。」

「あまりにも準備がいいので、こういう事は良くあるのかと聞くと」

「お前のような人でなしは初めてだ」

「どうせなら本格的にやりたいじゃない？急いで取り寄せちゃったっ」

「と言っ。」

「おそらく会長の爆乳さんが好き放題やる方で、副会長の雫様は真面目ちゃんだろう。副会長さんは毎日苦勞してそうだ。」

「おい貴様！ちゃんと話を聞いているのか！」

「あ、はい。すみません」

「危ない危ない、今は話に集中しなければ。」

「まったく、これだから男は……。とりあえず瀬野崎の件からだ。生徒が言うにはお前が瀬野崎を公衆で辱めたといっていたが、どうなんだ？」

「いや、そんな事は全く……」

「ねえ雫ちゃん。辱めるって、どういう事？」

「爆乳会長め。俺の話をさえぎりやがった。事情聴取なのに俺の話し聞く気ゼロだ。」

「ま、まあ、乙葉に分かるように説明すると、その人が恥ずかしいと思う事をする、またはさせる事だ」

「うーん、でも恥ずかしいと辱めるだと、字が違うわよ？よっしーが瀬野崎さんにした事を説明してくれないと、わからないわ」

よっしーって俺の事か？そして勝手に人にあだ名を付ける会長でさえ瀬野崎をさんづけで呼ぶとは。

「え、えつと、だな。その、遠藤が瀬野崎に、……え、えつちな……事をしたんだ」

「えつち？それって、具体的にどんな事？」

この野郎、知ってて言っつてやがるな。でも面白いからそのままにしておこう。

「だ、だから……、その、ひ、紐で縛ったり……、あ、脚を……、舐めたり……」

だいぶハードだな。顔とか赤くなってるし。ん？副会長、恥ずかしくて赤くなってるっていうより、何っーか、興奮してる？まさか副会長……。

「や、やや、やめて下さいっ！わ、私そんな事してないし、されてもいませんっ！」

ここで瀬野崎の仲裁。

「は、恥ずかしいので……やめて下さい……」

瀬野崎も顔が赤い。それで会長が少し残念そうだ。

「ウ、ウウンッ！」

副会長咳払い。

「す、すまない。えーと、遠藤。瀬野崎はないと言ってるがどうなんだ？」

「まったくもってやってません」

「本当？瀬野崎さんの中に大人のオモチャとか入ってなあい？」

「お、大人のオモチャだと？」

「は、入ってませんっ！」

これには瀬野崎が答えた。瀬野崎は耳まで真っ赤になっている。

「おい瀬野！本当に何もないだろうな？」

今度は野菊が絡んできた。めんどくせ〜。

「テメエさつき芳樹に名前呼ばれた時気持ち良さそうだったぞ！」

「い、いえ、それは……その……」

何でそれを言うかな〜。もう少しで瀬野崎の話しは終わりそうだ

ったのに〜。

「本当か？野菊」

「おう。ちゃんと俺の目で見たからな」

「野菊ちゃんはノーブラを強要されたって言ってたけど？」

「ノーブラを強要されると言うと、お前と遠藤は付き合ってるのか？」

ヤバい、野菊の事だからか口が滑りかねん。

「いや別にそんな関係って訳じゃないです」

俺の即座の否定に野菊は少しムツとしたようだが、すぐに状況を理解したようだ。

「そ、そんな関係じゃないって、野菊さんがかわいそうです！野菊さんは遠藤くんの為に、恥ずかしい思いをしてノーブラになっているのー！」

まさかの瀬野崎！野菊は理解したのに瀬野崎がメンドくさい事言いやがった！

「おい遠藤！瀬野崎はこう言っているぞー！」

「野菊ちゃんかわいそう！よっしー最低！」

会長はなんか楽しそうだけどな。

「ひ、ひどいです遠藤くん。私にもあんな事したのに……」

どんな事だよ。

「なんだと！？芳樹！テメエやっぱり瀬野とやりやがったのか！」

「い、いや！なんもしてない！瀬野崎、何もしてないよな！？」

「わ、私、お店の前なのに、立ち上がれない位に……。え、遠藤くん……。名前を呼ばれるだけで……」

何言ってるんだこの女！メツチャ語弊があるよ！

「芳樹、テメエエエ……。なに瀬野を調教してやがんだ！」

「い、いや違う！何もしてない！」

「な、名前を呼ばれるだけで、感じる位に……。調教……。だと？」

な、何言ってるんだ？副会長、大丈夫か？

「辱め……。調教……。名前を呼ばれるだけで……」

「あ……。栗ちゃん、目覚めちゃったかな？」

「あ、あの、会長。副会長、どうしちゃったんですか？」

「あのね、栗ちゃん、実はDMなの。それに凄くムツリさ

んなの。色々なキーワードが雫ちゃんの中で合体しちゃったのよ。
合体！しちゃったのよ。」

「は？」

何故合体を強調する？

「が、がったい？・・・合体？・・・合体！？」

「ちよつと、副会長目が危ないですよ？大丈夫ですか？」

「ああ、だ、駄目。こらえないと・・・。わ、私は、副・・・
会長っ」

だ、大丈夫かよ・・・。

「ねえよっしー？ここに何かついてなあい？」

とって自分の頬を指さしている。

特に何もついてなさそうだけど・・・。

「やっぱりついてるわよ。ねえよっしー、取ってくれない？」

「何もついてないと思いますけどね。」

とって頬を触ろうとした瞬間・・・。

「痛いっ！や、やめてよっしーっ、殴らないでえっ！」

といいながらその場に倒れた。何がしたいのか分からないけど、

若干笑ってる気がする。

「……………乙葉……………ず、ずるい」

「何してるんですか会長、ほら立って」

「やめてっ！私まだ汚れたくない！」

え、何言ってるんだコイツ。

「や、止める遠藤！瀬野崎や野菊にあきたらず、乙葉にまで手を
出すとは……………。やるなら私を好きにしるっ！」

「いや、だから！」

「芳樹！やっぱり瀬野崎とやったのか！！俺と言う可愛い嫁がい
ながら！」

「酷いです遠藤くん！いくら野菊さんと一緒に住んでるからって、
ノーブラを強要するなんて！」

「よっしー、どれだけ女の子を辱めれば気がすむの！？私、もう
汚された……………。私はもう汚れたのっ！うううっ……………オエッ
プ」

「俺は何もしてないって！」

「遠藤芳樹、お前を退学処分にする。文句はないな」

「……はい」

そして野菊は停学。

「瀬野崎も遠藤と野菊が同棲している事を知りながら、隠していた事により、原稿五枚の反省文だ」

瀬野崎にも被害が……。まあアイツのせいで一緒に住んでる事がバレたんだし、十枚でもいいな。

俺の学園生活、今日を持って終了となった。明日からバイトかな。

コンコンッ

おや、お客さんだ。

「どうぞ、飛んでくる槍には気をつけてくださいね」

どんな生徒会室だ。

「一年三組、開花院椿です」

槍を注意しようとしてもしない陰陽師、開花院椿さんだ。

「あら、椿ちゃんじゃなあ」

「あれ？会長知り合いなんですか？」

「いいえ、初めてよ〜」

なんだそりゃそりゃ。

「遠藤芳樹様と野菊の処分はどうになりました？」

「野菊は停学、遠藤は退学、瀬野崎は反省文だ。また、野菊が遠藤と同棲を続ける場合、野菊も退学処分にする」

「残念ね〜、よっし〜。性欲は程良く抑えないと。おっぱいプルプル栗ちゃんのようにねっ」

といいながら、会長は副会長の胸を後ろからわし掴んだ。

「や、やめろ乙葉っ！いきなり掴むなっ！」

会長が爆乳のせいで目立たないが、副会長もなかなかの巨乳である。

「芳樹様、何を見ているんですか？」

「え？あ、いや、何も？」

見てないとは言えないか。

「で〜？椿ちゃんは何のようなの〜？私におっぱい揉んで欲しい〜？」

「いえ、二人の処分を撤回してもらいに来ました」

「まあ」

「何？」

少し驚く生徒会。

「マジでか!!」

喜ぶ野菊。

「わ、私の処分は？」

そして悲しい瀬野崎優花。

「といつても、先ほど校長には直談判いたしましたので、正確には処分は無くなりました」

すげーな椿さん。どんな権力持ってたよ……。

「あら……、そう……」

何か、会長の空気が変わった？少し怖いな。

「そう言えば、開花院さん。あなた、野菊さんの入学にも後ろ盾をしたわよねえ？あなたと野菊さん、それと芳樹君って、一体どういう関係なの？」

会長の言葉使いが変わった。おっとりした空気も、今は凄く引き締まってる。

「別に。ただのお友達ですわ」

「……………」

「……………」

「……………そうっ。良かったわね、よっしー、野菊ちゃん。
退学も停学なくなったわよ」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

「やったな芳樹！また学校来てもいいんだろ！？」

「お、おう。椿さんにもちゃんとお礼しろよ？」

「ありがとうな椿！お前も少しは役に立つじゃねえか！」

「いいえ、礼なんていりませんわ。あなたの為じゃなくて芳樹様
の為ですから」

「んだと〜？」

「おいお前等。喜ぶのはいいがもう下校時間だ。生徒会室の戸締
まりをするから早く帰れ」

「馬鹿野郎！乙女の準備は大変なんだ！」

「え？乙、え？乙女？」

ガチャンツ

「わ、あぶねっ！コップをなげるな！」

ピンポーン

「おい椿さん来ちゃったぞー。外で待ってるからなー」

「あ、待って！まだ開けんな！」

何でだよ。椿さん待たせちゃうじゃねーか。

「おまたせー！」

「忘れもんじゃないか？じゃあいくぞ」

「待てって！」

「もう、何なんだよ……………」

チュツ

「……………え？」

「い、行ってきますと、行ってらっしゃいの……………チュウだ。」

つ、椿がいたら、出来ねーからな……」

「……お、おう」

「……い、いくぞ芳樹っ。早くしろっ」

ビックリするほど素直じゃねーな。野菊らしくていいけど。

ガチャッ

「お待たせしました、椿さん」

「いいえ、全然待つてませ……」

「遅いよっしー！女の子待たせちゃだめだよ」

「遅いぞ遠藤！私は放置プレイは好きじゃないぞ！」

……え？

「な、何で会長と副会長がいるんですか？」

「よっしーが発情しないようにっ！」

「遠藤と野菊が同棲するのは許すが、私達生徒会がお前等を監視する事にした。お前等が不適切な行為をしないようにな」

ええ〜。大分めんどくせ〜。

「いくぞ遠藤。お前のせいで私達も遅れてしまっ」

「よっしー早く〜」

「行きましよう、芳樹様」

はあ。一難去ってまた一難。まあ学校行けるだけ嬉しいか。考え方を変えれば、女の子達とハーレム登校だ。嬉しいと考えよう。

「じゃ、行くか野菊」

「おう。・・・チュウ、しといてよかった」

「ん？何か言ったか？」

「べ、別にっ！はやくしろ馬鹿芳樹！遅刻すんぞ！」

ま、今日も一日頑張るか。

退学（後書き）

学校裏新聞

月×日（水）

大ニュース！！

学園美少女四天王、男子生徒一人を奪い合う！

（省略）

|||||

芳樹 「なんじゃコリャー！！！！！！」

金欠

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」

遂に、遂にこの時が来てしまった。いつかこうなることは予想していたが、思いのほすすか早かった。

「どうした芳樹。溜め息何かついて」

野菊。野菊だ。今悩んでいる事の原因となる人物だ。それ故にコイツに悩みを相談する事は出来ない。

「おい無視すんなよ。悩み事なら俺が解決してやるぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあお前、この家から出ていくか？」

「ムッリ」

だよな。

「だが何を悩んでいるかは理解したぞ」

「マジすか野菊さん」

「おう。解決策があるから、こっち来い」

と言われて来たのは、今や野菊の部屋とかした俺の部屋だ。こんな場所で俺の悩みが解決するとはおもえないが。

何をするのかと思っていると、いきなりベッドに仰向けに寝る野菊。

「さ、さあ芳樹、好きにして・・・良いぜ？そ、そろそろ子供、欲しい・・・よな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「あ、あれ？違うのか？」

コイツ、俺の悩み何だと思ったんだよ。

「い、いや、あまりにも可愛いすぎる女の子と一緒に住むことになって、我慢出来なくなったのかと。だから俺に出て行って言ったんだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも大丈夫、俺も芳樹と同じ気持ちだ。さ、さあ芳樹、早く・・・来てっ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・瀬野崎に相談してみるか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あー、金欠ですか。ご両親からの仕送りなんかは？」

「親に野菊の事は言ってない。毎月俺一人分の小遣いと食糧、あとワイハと自分達が仲良い事を自慢するような写真だけだ」

「そ、そうなんですか。バイトなんてどうですか？」

バイトね。それが一番まともか。

「あ、私良いバイトしってますよ？」

「マジで？一応教えてくれない？」

さすが瀬野崎、相談して良かった。そのバイトが良い感じならやってみるか。

「い、いいですけど・・・、一つ、お願いを聞いてくれませんか？」

「おう、俺に出来る事なら何でも言うて」

「そ、その・・・、名前を・・・呼んでくれま・・・」

「却下」

|||||

「よお遠藤、お前バイト探してるんだって？」

親友のあいつだ。

「なら良いバイト教えてやるうか？」

「いいよ、どうせろくでもないだろ」

「フッフッフ、断つていいのか？後悔しても知らないぞ？」

「……ま、まあ聞いてみるくらいはいいか」

「へっへっへ。いやさ、今度合コンがあんだよ。それでよ、男子の人数がたりねえからお前来てくんね？」

「……怪しさMAXだな。」

「給料は？」

「は？」

「だから給料。一応バイトなんだろう？何時間いたら何円みたいな時給制か？」

「お前馬鹿かよ！給料は女の子だ！好みの女の子を落としてお持ち帰りしてやれ！お前今、親が出張中だろう？うまくいけば一発やれ……」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「よっ、芳樹。足痛くないか？」

「ようナツ。別に何ともないけど」

「……失敗だ」

え？何？怖い怖い怖い。何が失敗したんだよ。コワイコワイコワ

イ。

|||||

「こんにちは、芳樹様。バイトを探しているとお聞きしましたが？」

「そうなんですよ。野菊も居るから仕送りじゃ足りなくて」

「バイトは分かりませんが、開花院家で援助しましょうか？人間と妖怪の共同生活なんて、前例がありませんから。何か手伝える事があったら力になりますよ？」

「い、いえいえ！野菊の入学にも手を貸してもらったのに、生活まで助けてもらう訳にはいけませんよ！」

「でも、困っているんじゃない……」

「じ、じゃあ俺バイト探すんで！」

「あ、芳樹様！」

恐るべし開花院。陰陽師どんだけの経済力持ってるんだ。

|||||

「あら〜、よっしーじゃなあい」

「よう遠藤。厄介事は起こしてないだろうな」

「こんにちは会長、副会長。じゃ、俺は用事があるんで」

「ちよつと待ってよよっし、バイト探してるんでしょ？」

何でこんなに広まってるんだよ。そして広まってるにも関わらず何故まともなバイトが発見できない。

「ちよつど良かった。遠藤、これを見る」

この人は命令形しか文法の学習をしてないのか。

副会長様は、なにやらポスターのような物を手に持っている。

「なにになに？バイトしてくれる生徒募集。どんな仕事かは、生徒会室に来てからのヒ・ミ・ツ？」

なんじゃコリヤ。

「バイトの内容は生徒会室に来ないと教えられないが、時給は・・・・・・五千だ」

マジかよ。

「悪い話じゃないでしょ？」

「ま、まあ悪い話ではないですけど、恐ろしく不安です」

「だあいじょくおぶよお。生徒会の仕事なんだから、悪い事はしないわっ」

生徒会だから、いや、会長だから心配なんだよな。

「兎に角、一回生徒会室で話そう。やるかやらないかはその後決めればいい」

「さあさあ、生徒会室にLet's go!」

何か発音いいな。

凄く不安だが、生徒会のバイトにかけるしかない。

生徒会がバイト募集していいのかよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5052w/>

一つ家の鬼娘！

2011年12月19日00時55分発行